遊嵩山日記　［河南河南府登封縣］

●天啓三年（一六二三）二月朔日～二十五日、二十五日間＊　徐霞客三十八歲

＊日記本文があるのは、十九日～二十五日の七日間。

凡例

・日の区切りごとに簡単な概要を付す。

・**■本文の部は**、日ごとに区切る。

・**■訳注の部**は、日ごとに区切り、さらに内容上のまとまりでも区切り、**●訓訳**・**●語注**・**●口語訳**の順で記す。

・本文は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年、「上海新整理本」と略）とする。

　徐霞客の自注は［　］で示す。

参照文献等（「　」は略称）

◇訳注＊

・徐兆奎注釈『徐霞客名山遊記選注』中国旅遊出版社、一八五二年（「徐名山注」）

・朱恵栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年（「朱恵栄」）

・黄坤『新譯徐霞客遊記』三民書局、二〇〇二年（「黄珤」）

・黄坤選評『徐霞客遊記　選評』上海古籍出版社、二〇〇三年（部分、「黄選評」）

・朱樹人選釈『徐霞客遊記』崇文書局、二〇〇七年（「朱樹人釈」）

・朱復融訳注『徐霞客遊記』広州出版社、二〇〇八年（「朱復融訳」）

・湯化等注評『徐霞客遊記』（歴代名著精選集）鳳凰出版社、二〇〇九年（「湯注評」）

◇参考文献

・『嵩書』二十二巻、明傅梅撰、万暦四十年刊（「嵩山文献叢刊」第一冊）

・『説嵩』三十二巻、清景日昉撰、康熙六十年刊（「嵩山文献叢刊」第三冊）

・『嵩岳游記』四巻、清席書錦撰、光緒二十年撰、民国八年刊（「嵩山文献叢刊」第四冊）

・『滎陽縣志』二巻、明鈔本（「嘉靖滎陽県志」）

・『滎陽縣志』八巻、清顧天挺等纂修、清康熙十七年（「康熙滎陽県志」）

・『滎陽縣志』十二巻・図一巻、清李煦修・清李清纂、乾隆十二年（「乾隆滎陽県志」）

・『續滎陽縣志』十二巻、劉海芳等修・盧以洽纂、民國十三年（「続滎陽県志」）

・『密縣志』十六巻、清景綸修・清謝増纂、嘉慶二十二年（「密県志」）

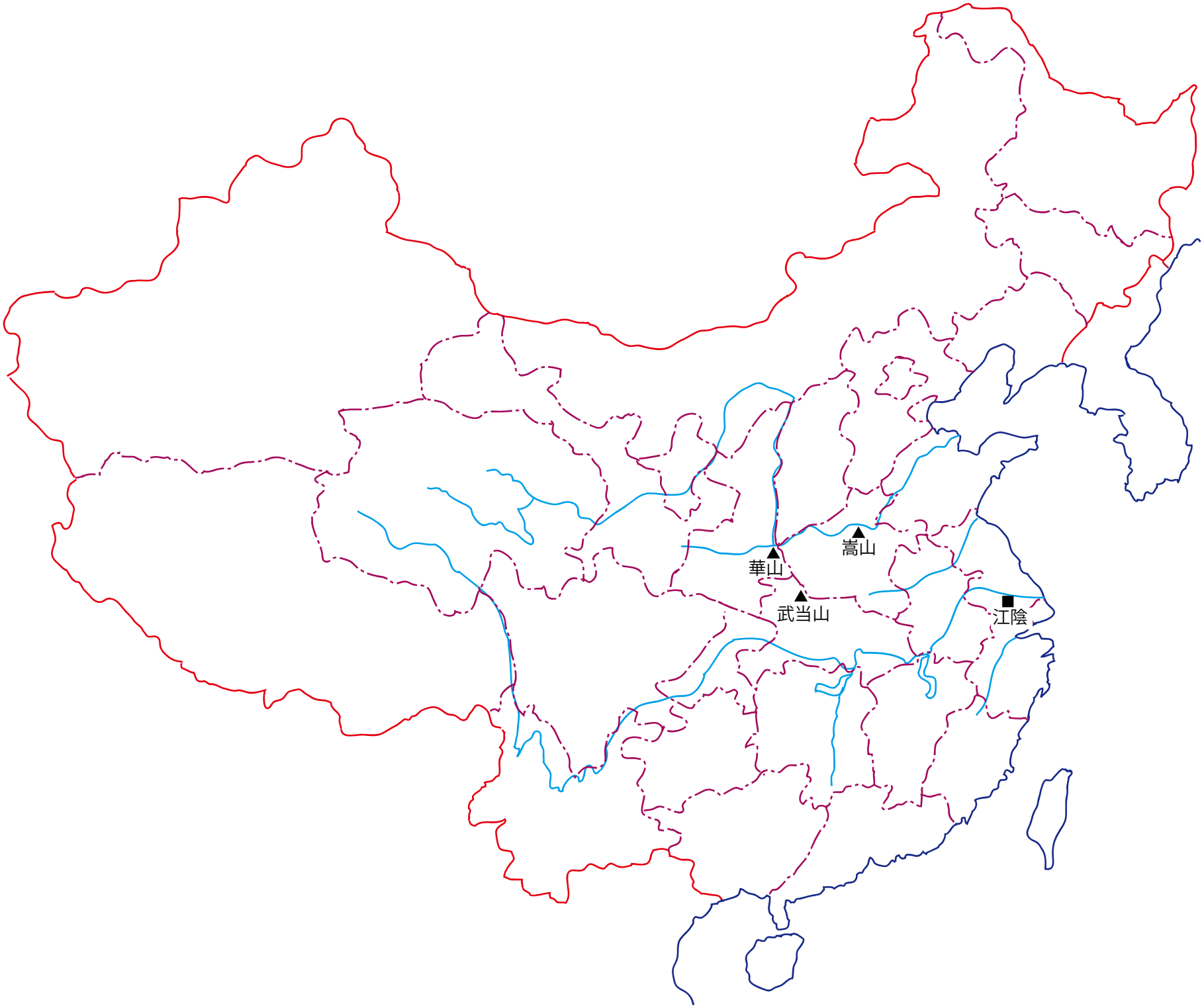
・『偃師縣志』三十巻・首一巻、清湯毓倬修・清孫星衍等纂、乾隆五十一年（「偃師県志」）

・『登封名勝文物志』河南省登封県地方志編纂委員会編、一九八五年

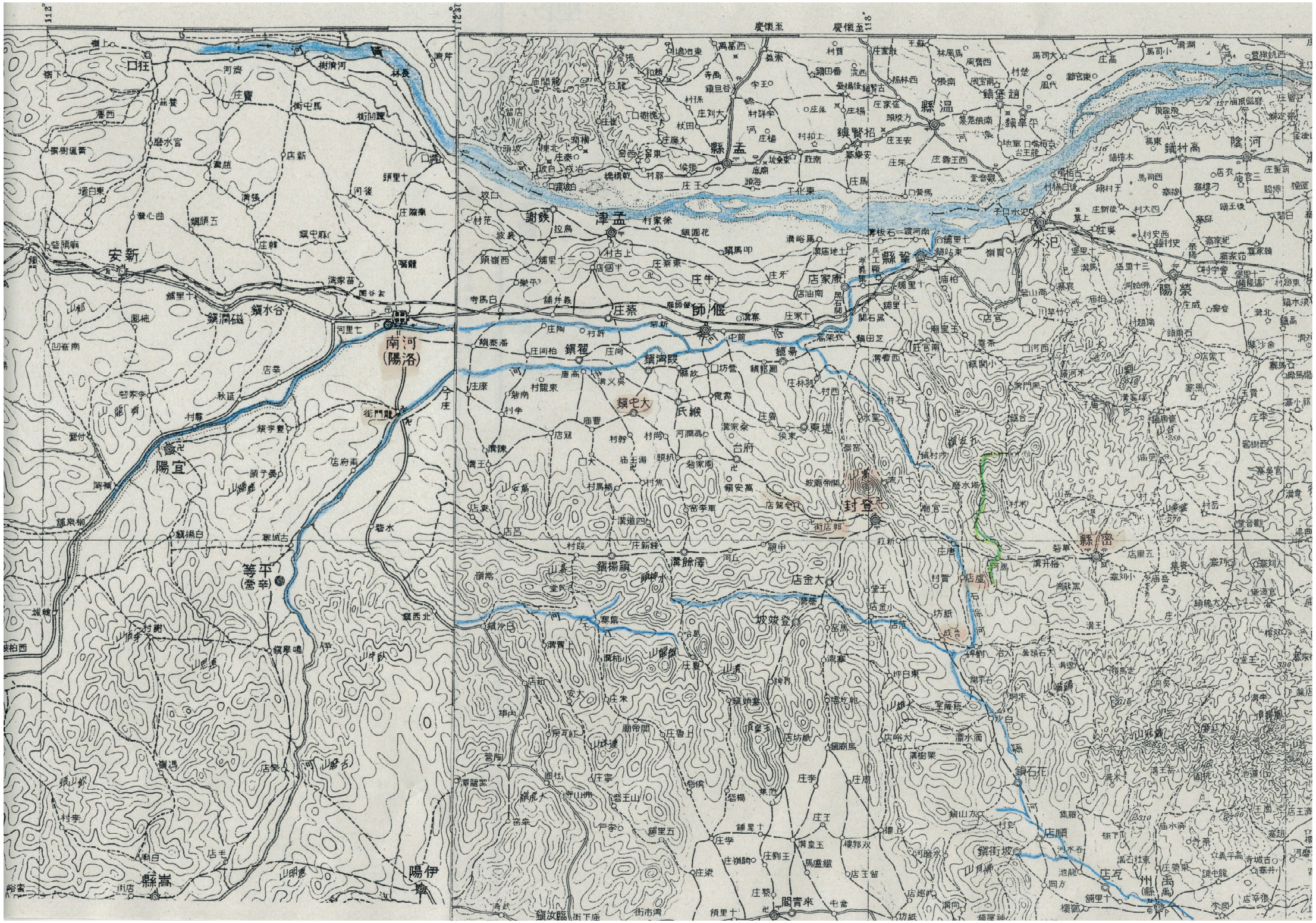
・『中岳嵩山』崔炎寿編著、黄河水利出版社、二〇〇〇年

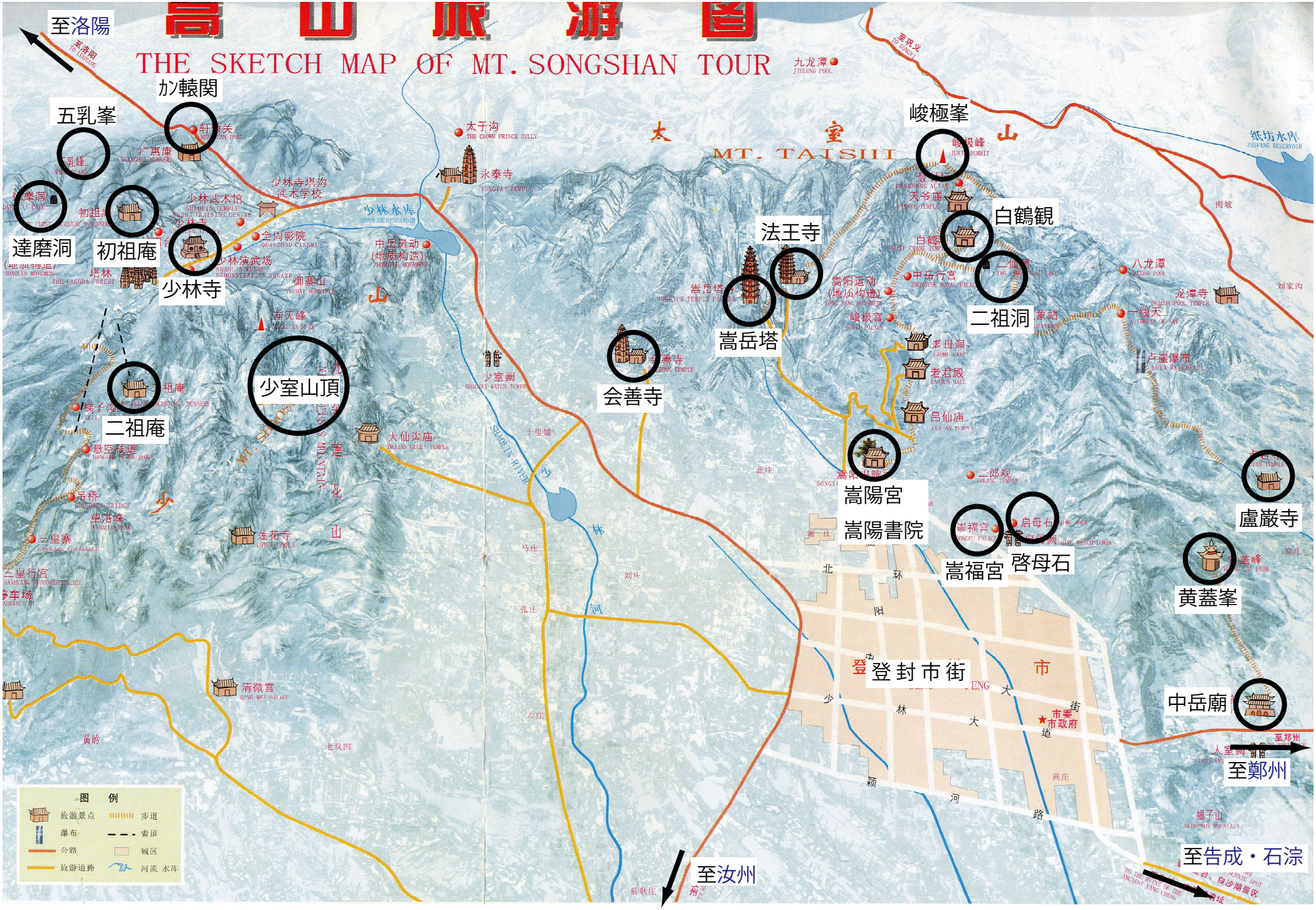
・『登封市志』登封市地方志編纂委員会編、中州古籍出版社、二〇〇八年

・『嵩山歴史建築群』鄭州市嵩山歴史建築群申報世界文化遺産委員会弁公室編著、科学出

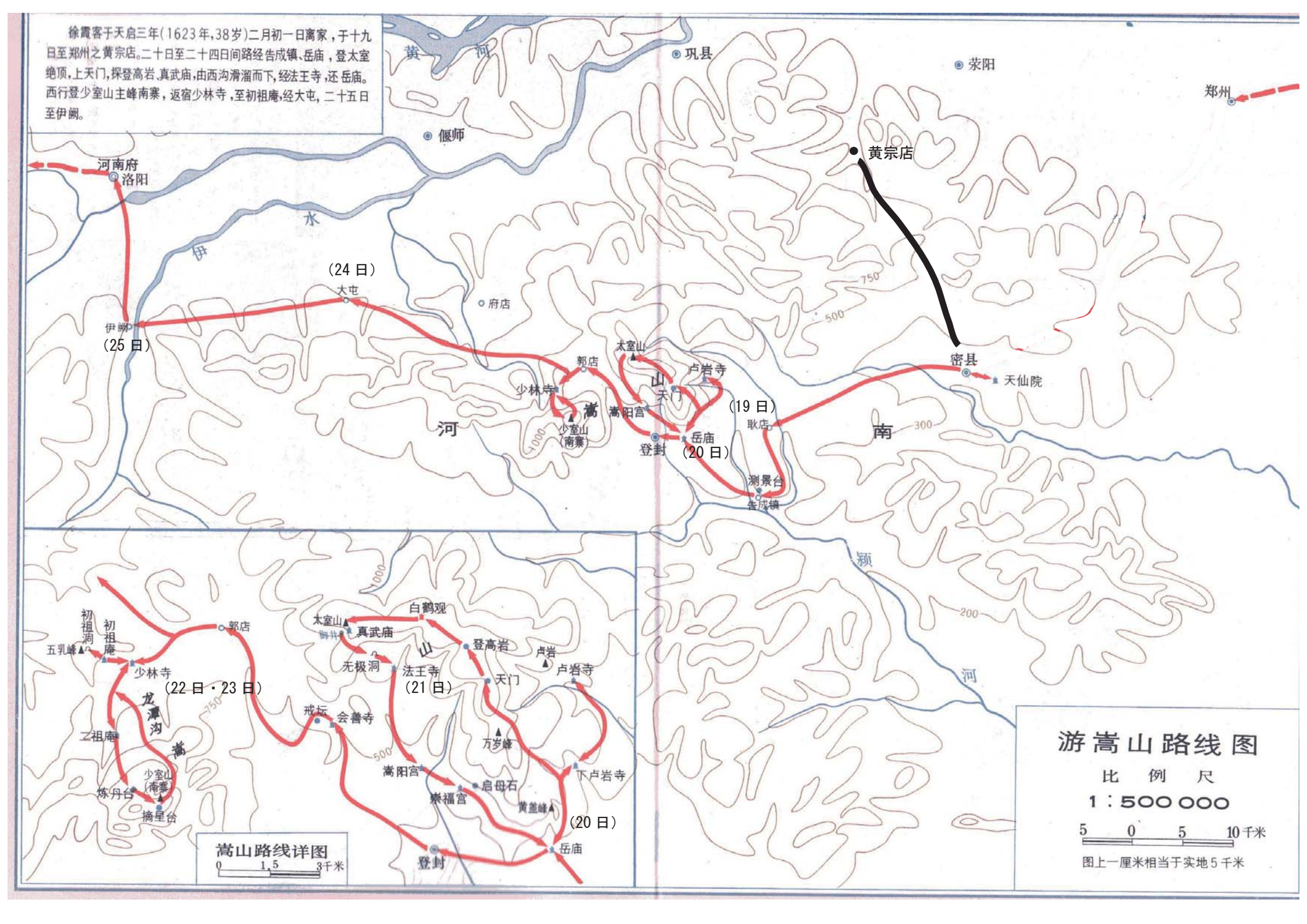

嵩山
華山
武当山
江陰

嵩山エリア
郑州
开封
洛阳
三门峡
焦作
新乡
晋城
济源
登封
新密
巩义
荥阳
中牟
新郑
尉氏
长葛
鄢陵
扶沟
许昌
郏县
宝丰
襄城
平顶山
叶县
舞阳
西平
漯河
商水
舞钢
上蔡
方城
遂平
南阳
唐河
社旗
驻马店
汝南
确山
泌阳
正阳
西峡
淅川
内乡
镇平
邓州
新野
丹江口
十堰
襄樊
枣阳
信阳
罗山
随州
广水
大悟
商城
金寨
六安
霍邱
阜阳
阜南
亳州
淮北
宿州
淮南
寿县
周口
商丘
菏泽
济宁
兖州
曲阜
邹城
鄄城
濮阳
巨野
嘉祥
金乡
鱼台
成武
单县
曹县
定陶
东明
长垣
兰考
民权
睢县
宁陵
虞城
夏邑
柘城
太康
鹿邑
淮阳
郸城
沈丘
项城
界首
太和
利辛
涡阳
蒙城
永城
濉溪
砀山
芒砀山
萧县
沛县
丰县
杞县
滑县
淇县
辉县
卫辉
延津
封丘
原阳
温县
孟州
孟津
偃师
伊川
汝阳
嵩县
栾川
老君山
石人山
鲁山
叶县
桐柏
唐河
淅川
内乡
西峡
丹江口
老河口
谷城
襄樊
枣阳
随州
信阳
罗山
息县
潢川
光山
新县
固始
淮滨
霍邱
阜南
颍上
寿县
凤台
淮南
舒城
六安
金寨
商城
金刚台
1584
鸡公山
768
太白顶
1140
桐柏
五峰山
872
白云山
983
石人山
2153
老君山
2192
栾川
冠云山
1866
老鸦岔城
2414
青岗
1903
太室山
1492
嵩山
1150
南峰
2155
芒砀山
156
伏牛山
秦岭
豫西山地
桐柏山
大别山
淮河
黄河
汉江
丹江
白河
唐河
白水
南阳盆地
豫东平原
豫中
豫西
豫南
豫东
豫北
豫西南
皖北
皖西
皖南
苏省
鲁省
陕西省
湖北省
南阳湖
昭阳湖
微山湖
洪泽湖
骆马湖
南湾水库
板桥水库
宿鸭湖水库
白龟山水库
鲇鱼山水库
徐家河水库
西排子河水库
丹江口水库
黄龙滩水库
陆浑水库
故县水库
小浪底水库
三门峡水库
盐池
解池
神农架
神农顶
3105
保康
南漳
宜城
荆山
大洪山
桐柏山
大别山
伏牛山
秦岭
巴山
武当山
太行山
王屋山
中条山
华山
崤山
熊耳山
外方山
牛心山
嵩山
黄河
淮河
汉江
丹江
白河
唐河
白水
南阳盆地
豫东平原
豫中
豫西
豫南
豫东
豫北


112°
112°37′
慶懷至
慶懷至
113°
口狂
安新
南河
(陽洛)
陽宜
等平
(堂辛)
縣嵩
陽伊
縣孟
縣温
縣鞏
縣密
縣禹
(縣禹)
水汜
陽縈
陰河
封登
師偃
庄蔡
氏緱
東堤
台府
坡坡登
店金大
鎮石花
鎮街坡
鎮賢招
鎮村高
鎮水谷
鎮澗石磁
鎮翟
鎮湾段
鎮屯大
鎮揚巔
鎮汝臨
鎮泉柳
鎮李豐
鎮沙日
鎮舉嶋
鎮西北
鎮山郊
鎮山郎
鎮中麻
鎮頭五
鎮頭廟
鎮頭山
鎮頭巔
鎮頭鑿
鎮頭鑿
鎮頭鑿


高山旅游图
THE SKETCH MAP OF MT. SONGSHAN TOUR
至洛陽
五乳峯
カン轅関
達磨洞
初祖庵
少林寺
少室山頂
二祖庵
峻極峯
白鶴観
法王寺
二祖洞
嵩岳塔
会善寺
嵩陽宮
嵩陽書院
嵩福宮
啓母石
盧巖寺
黄蓋峯
中岳廟
登封市街
至鄭州
至汝州
至告成・石淙
太室山
MT. TAISHI
少室山
MT. SHAOSHI
少林寺
少林水库
少林武术馆
少林寺塔沟武术学校
全周影院
少林演武场
御寨山
连天峰
少室阙
大仙沟庙
连花寺
清微宫
三皇寨
三皇行宫
悬空栈道
吊桥
望洛峰
桃子沟
太子沟
永泰寺
中岳运动(地质构造)
嵩岳塔
嵩阳运动(地质构造)
中岳行宫
峻极宫
老母洞
老君殿
吕仙庙
二郎观
崇福宮
启母石
九龙潭
八龙潭
龙潭寺
一线天
卢崖瀑布
纸坊水库
南坡
刘家沟
象峪
十里铺
北庄
北环阳路
少林大道
颍河路
市委
市政府
高庄
蝎子山
黄岭
老坟凹
左庄
马庄
刘庄
张庄
后耿庄
图例
旅游景点
步道
瀑布
索道
公路
城区
旅游道路
河流 水库

徐霞客于天启三年(1623年,38岁)二月初一日离家，于十九日至郑州之黄宗店。二十日至二十四日间路经告成镇、岳庙，登太室绝顶，上天门，探登高岩、真武庙，由西沟滑溜而下，经法王寺，还岳庙。西行登少室山主峰南寨，返宿少林寺，至初祖庵，经大屯，二十五日至伊阙。



版社、二〇〇八年

・『中華人民共和国　地名詞典　河南省』商務印書館、一九九三年（「地名詞典」）

・『菩提達磨嵩山史蹟大観』増田亀三郎・岡田栄太郎編、菩提達磨嵩山史蹟大観刊行会、一九三二年

◇参考地図

○徐霞客遊記関連図

丁文江撰『徐霞客遊記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年（「丁本付図」）

褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地図出版社、一九九一年（「路線図」）

○外邦図（陸軍参謀本部陸地測量部製作）

・「登封」五十万分一（五十万「登封」図）

・「洛陽」五十万分一（五十万「洛陽」図）

・「新鄭縣」北支那十万分一圖（「北支図・新鄭縣」）一九三五年

・「登封縣」北支那十万分一圖（「北支図・登封縣」）一九三六年

・「葛哈」北支那十万分一圖（「北支図・葛哈」）一九三五年

・「登封縣」十万分一底図（「底図・登封縣」）一九三六年

・「鄭縣」河南省十万分一圖（「河南図・鄭縣」）一九三八年

・「新鄭縣」河南省十万分一圖（「河南図・新鄭縣」）一九三八年

・「登封縣」河南十万分一圖（「河南図・登封縣」）一九三八年

・「洛陽縣」河南十万分一圖（「河南図・洛陽縣」）一九三八年

○現代地図

・『河南省地図集』中国地図出版社、一九九七年（「大地図」）

・『河南省地図冊』中国地図出版社、二〇〇四年（「中地図」）

・『河南省地図集』星球地図出版社、二〇〇九年（「小地図」）

・『嵩山旅游交通図』湖南地図出版社、二〇〇一年（「現代地図・嵩山」）

○インターネット上の地図類

・百度 BAI-DU（BD）

・Google Earth（GE）

＊訳注の内、「徐名山注」「朱恵栄」「黄珅」「黄選評」「湯注」は、嵩・華・太和の三山の遊記を収めるが、他の三点は嵩・華のみで、太和山遊記を省いている。今回の旅行の第一の目的が太和山にあったことを徐霞客は明言しているにも関わらず、これを省いていることには、後者三点の見識の程が垣間見える。

●訳注稿

【序】

＊概要：徐霞客の旅行十七回のうち、遊記の残るものは十回を数える。そのうち、旅の目的などを記した序文があるのは、四回目の福建省九鯉湖への遊、十回目の西南遊、そして五回目の本稿の遊だけである。この序では、元々は、湖北省の武当山を経由して四川省の峨眉山への旅を構想していたが、母親の孝行のために遠距離の行程は避け、嵩山・華山を経由して、武当山を最終目的としたことを述べる。二月一日に出立。十九日から記録が始まる。移動手段は不明。平地はだいたい山轎が多いようであるが、二十四日条に「策騎」の語が見え、そのときは騎乗だったのだろうか。

■本文の部

余髫年蓄五嶽志。而玄岳出五嶽上、慕尤切。久擬歴襄・鄖、捫太華、由劍閣連雲棧、爲峨眉先導。而母老志移、不得不先事太和、猶屬有方之遊。第沿江泝流、曠日持久、不若陸行舟返、爲時較速。乃陸行汝・鄧間、路與陝・汴略相當。可以兼盡嵩・華、朝宗太岳。遂以癸亥仲春朔、決策從嵩岳道始。

■訳注の部

●訓訳

余髫年より五嶽の志を蓄ふ。而して玄岳は五嶽の上に出で、慕ふこと尤も切なり。久しく、襄・鄖を歴し、太華に捫し、劍閣の連なる雲棧によりて、峨眉の先導となすを擬す。而るに母老い志移り、太和を事とするを先にして、猶ほ有方の遊に屬さざるを得ず。第だ江に沿ひ流れを泝するは、曠日持久なれば、陸行して舟返するの、時較や速しとなすに若かず。乃ち汝・鄧の間を陸行するは、路は陝・汴と略ぼ相當す。以て兼ねて嵩・華を盡くし、太岳に朝宗すべし。遂に癸亥仲春朔を以て、策を決して嵩岳の道より始む。

●語注

○髫年　髫は、子どもの、前に垂らす短い髪。髫年で、幼いとき。

○五岳　時代による変遷もあったが、明代では、中岳嵩山、東岳泰山、西岳華山、北岳恒山、南岳衡山。

○玄岳　五行説からすれば、玄は北であり、北岳は恒山となる。諸注は、ここでは嵩山のことを言っているとするが、徐名山注は「元岳」であり、武当山のことだという。湯注も玄岳には二つあって、一つは北岳恒山、もうひとつが武当山で、明代には玄岳・太岳と称され、五岳の上に置かれたことから、ここの玄岳は武当山だとする。黄珅も同じ。これに従う。武当山は、湖北省丹江口市にあり、周囲四百キロメートル。主峯の天柱峯は海抜千六百十二メートル。真武神人（玄武神）が得道した聖地とされ、道教の聖地であったが、明代に永楽帝が復興して宮観を大いに整え、山名を太和山と改めて太岳の号を与えた。嘉靖帝は更に宮観を整備し、名を玄岳と改めて五岳の上に置いた。徐霞客のこの度の遊は、嵩山・華山・太和山を歴するものだが、第一の目的は、太和山に登ることにあったわけである。

○襄　襄陽府。府治は今の襄樊地級市襄陽区。漢水沿いに位置する。
○鄖　鄖陽府。府治は今の十堰地級市鄖県。ここも襄陽同様、漢水沿いに位置する。武当山はこの二つのまちの間にある。徐霞客の住む江陰から長江を遡り、湖北省の武漢から漢水に入って遡及すると、襄陽、武当山、鄖の順で訪れることになる。鄖から陸路を北上すれば、華山に至る。
○太華　華山。五岳の一つで西岳。今の陝西省華陰市に位置する。
○劍閣　中原から四川省へ入る難所のひとつ。
○雲棧　空中高く懸かる梯子や、架け橋の道。中原から四川へ入る途上には、秦棧・蜀棧があった。
○峨眉　峨眉山。四川省の仏教名山。
○有方之遊　『論語』里仁に「子曰、父母在、子不遠遊、遊必有方」とある。方は古注は、一定の規律とする。規律のある旅行をするとは、危険なめに会わないよう、羽目を外さないよう、ということか。新注は「一定の方角」とし、どこに行くかが親に分かるようにする、行き場所をきちんと告げておくということか。いずれにせよ、母親が高齢で存命なので、遠くへの長期間の旅は避けるということであろう。
○汝　汝州。明代は府。府治は今の河南省平頂山地級市汝州市（かつては臨汝市といった）。
○鄧　鄧州。南陽府に属した。今の河南省南陽地級市鄧州市。
○陝　陝州。河南府に属した。今の河南省三門峡地級市陝県。黄河沿いに位置する。
○汴　汴梁。開封府の府治。今の河南省開封地級市開封市。ここも黄河沿いである。
○嵩　嵩山。
○華　華山。
○朝宗　諸侯が天子にまみえること。太和山が明帝から尊崇されていたので、その山に登ることをかく言ったのだろう。
○太岳　諸注は東岳泰山とするが、位置があわない。徐名山注・黄珅のごとく、太和武当山とすべき。前掲注「玄岳」参照。
○癸丑　熹宗天啓三年（一六二三）。

●口語訳

私は、幼い頃から五岳に対する志を抱いていた。しかし玄岳太和山（武当山）は五岳の上にあるものであり、それへの思慕の念は五岳よりも高いものがあった。ずいぶん前から、先ず先駆けとして湖北省の襄陽府と鄖陽府との間にある太和山を訪ねて、更に北上して陝西の華山に登り、次いで劍閣にある連なる雲棧を通って、四川の峨眉山へ行く、という大旅行を心に描いていた。しかし母親が年老いてきたため、志を変更して遠距離の遊行は避け、太和山までの旅行を先ず行い、親への孝行を優先させることとした。ただ、長江や漢水などの流れを遡及するのでは日数がかかりすぎるので、陸行して進み、帰路を船で下ってくる方が時間が短くてすむのでよいと考えた。また、南側の襄陽から鄧州・汝州を通って嵩山に至る陸路の道のりは、北側の開封から嵩山を経て陝州に至るものとほぼ同じくらいである。加えて、開封経由の陸路を取れば、嵩山・華山のどちらをも訪問した上で、最後に太和山にご挨拶できる。かくして嵩山から始める陸路を取ることと決し、天啓三年二月一日を以て旅を始めた。

【二月十九日】

＊十九日かけて、河南鄭州の黄宗店という町に着いている。その間の旅程は明らかではないが、徐州や開封を通る、メインルートを通ったものだろう。池を観覧したり、密県に入って天仙院という道観を参観する。登封県に入り、耿店に泊。

■本文の部

凡十九日、抵河南鄭州之黄宗店。由店右登石坡、看聖僧池。清泉一涵、停碧山半。山下深澗交疊、涸無滴水。下坡行澗底、隨香爐山曲折南行。山形三尖攢立如覆鼎、衆山環之、秀色娟娟媚人。澗底亂石一壑、作紫玉色。兩崖石壁宛轉、色較縝潤。想清流汪注時、噴珠泄黛、當更何如也。十里、登石佛嶺。又五里、入密縣界、望嵩山尚在六十里外。從岐路東南二十五里、過密縣、抵天仙院。院祀天仙。黄帝之三女也。白松在祠後中庭、相傳三女蛻骨其下。松大四人抱、一本三幹、鼎聳霄漢、膚如凝脂、潔逾傅粉、蟠枝虬曲、緑鬣舞風、昂然玉立半空、洵奇觀也。周以石欄。一軒臨北、軒中題詠絶盛。徘徊久之、下觀滴水。澗到此忽下跌、一崖上覆、水滴歴其下。還密、仍抵西門。三十五里、入登封界、曰耿店。南向石淙道、遂税駕焉。

■訳注の部

●訓訳

凡そ十九日にして、河南鄭州の黄宗店に抵る。店の右より石坡を登り、聖僧池を看る。清泉一涵、碧山の半ばに停まる。山下は深澗交々疊し、涸れて滴水も無し。坡を下りて澗底を行き、香爐山に隨ひて曲折して南行す。山形は三尖の攢立すること鼎を覆すが如く、衆山　之を環し、秀色娟娟として人に媚ぶ。澗底は亂石一壑たりて、紫玉の色を作す。兩崖は石壁　宛轉として、色較や縝潤たり。清流の汪注せし時を想ふに、珠を噴し黛を泄するならん。當に更に何如なるべけんや。

十里にして、石佛嶺を登る。

又た五里にして、密縣の界に入る。嵩山を望むこと尚ほ六十里の外に在り。岐路より東南に二十五里にして、密縣を過ぎ、天仙院に抵る。

院は天仙を祀る。黄帝の三女なり。白松　祠の後ろの中庭に在り。相ひ傳ふ、三女骨を其の下に蛻す、と。松は大なること四人抱へにして、一本に三幹ありて、霄漢に鼎聳す。膚は凝脂の如く、潔なること傅粉を逾えたり。蟠枝は虬のごとく曲り、緑鬣　風に舞ひ、昂然として半空に玉立す、　洵（まこと）　に奇觀なり。周らすに石欄を以てす。一軒北に臨み、軒中は題詠絶盛なり。徘徊之を久しくし、下のかた滴水を觀る。澗　此に到りて忽ち下跌し、一崖　上覆し、水滴其の下を歴す。

密に還り、仍りて西門に抵る。

三十五里にして、登封の界に入る、耿店と曰ふ。南に向へば石淙の道なり。遂に駕を税せり。

●語注

○黄宗店　徐名山注は、今の「王宗店」という。「地名詞典」には、王宗店について次のようにある。滎陽県城関鎮から十八㌔の地にあって、崔廟郷に属す。元は龍門鎮と言い、聖僧店・王宗店・王僧店などとも言った。村落は谷沿いに南北に伸び、人口二百六十人程度。もと集市が立っていたが、乾隆年間に洪水に遭い、崔廟郷に移った。村の南に聖僧泉があって、枯渇せず、村人の飲用水源になっている、と。「乾隆滎陽県志」（巻三建置）に「龍門鎮　按龍門鎮、俗呼王僧店、又呼聖僧店。蓋因鎮西山畔有石佛。現半體、郷人欲見其全、隨掘隨滿、不可得覩。有泉、前出匯爲池。澇則溢出成河。旱亦盈盈不涸、足供一鎮之汲。此亦靈異之蹟也」とある。また「続滎陽県志」（巻一第七区図）には聖僧店が見え、「集鎮」（巻三建置志）に「崔廟鎮　舊志爲龍門鎮。乾隆年間移此」とある。滎陽県と密県との境に位置し、かつては交通の要衝として栄えたのだろう。徐霞客がここを起点に記述を始めたことがそれを裏付けよう。のち乾隆以後、崔廟鎮にその座を譲り、僻地の寒村となったのだろう。「北支図・登封縣」には王孫店、「河南図・新鄭縣」には王村店が見える。「大地図」「小地図」・BD には王宗店とある。「路線図」では、黄宗店を、鄭州と登封とを結ぶ直線上に置いているが、これは誤り。添付の地図では正しい位置に改めた。

○聖僧池　徐名山注は、鄭州市の西南境にあると言う。鄭州地級市の西南境であり、滎陽県に属す。前掲注引く「乾隆滎陽県志」にある「泉」の水がたまったところであろう。「続滎陽県志」にはこの水の記述は無く、もはや有名なものではなくなっていたのであろう。

○清泉一涵　涵は湿る、潤う。清らかな池が一筋ある様か。

○香爐山　徐名山注は、今は鄭州の西南にあるという。「地名詞典」には次のようにある。北緯三十四度、東経百十三度、密県城関鎮の西北十二㌔、滎陽県との境にある。主峯は海抜六百六㍍。山形が香炉に似ているのでかく言う。徐霞客が登臨した、と。しかし遊記にあるように、徐霞客はこの山を遠望はしたが、登ってはいない。「密県志」（巻六山水志）に「香爐山　亦以形似。香爐山俗呼爲小頂。上有織錦洞。洞内有倒井、水嘗溢出。入洞百餘歩、仰觀、有孔如梭。俗傳神女織錦于此」とある。「河南図・新鄭縣」・BD には小頂山の名が見える。

○縝　細密なこと。

○石佛嶺　徐名山注は、今は鄭州市の西南境にあるという。他の資料では確認できなかった。

○過密縣　密は、漢代から置かれていた県。「密県志」はそこから滎陽県へ北上するルートについて次のように言う。「（密県城関鎮からの）北路　〔八里〕八里廟〔六里〕袁荘〔四里〕山神廟〔十里〕方溝〔二里〕聖僧店、抵滎陽界。距城、積三十里許」（巻五疆域志）。徐霞客はこのルートを逆に南下したものと思われる。

○天仙院　徐名山注は、今は密縣の境にあるとするが「地名詞典」には見えない。「密県志」（巻七建置志）に「天仙廟　在縣東五里。明世宗時創建」とあり、また天仙洞・滴水棚・白松についてかなりの記述を載せる。また清の李鵬鳴・沈沛の「滴水棚詩」、明の楊思聖・李攀龍らの「白松詩」を収録しており、天仙院とその松が有名であったことが分かる。「北支図・新鄭縣」「河南図・新鄭縣」にも天仙廟として見える。しかし、その後の資料には見えないことから、さびれてしまい、消滅したのではないか。

○天仙　天仙聖母碧霞元君、天仙娘娘ともいう。南の媽祖と並び、主に華北で尊崇されて

いた女神。東岳大帝の娘であるとか、黄帝が派遣した女仙であるなどの伝承があるが、徐霞客は、黄帝の三女としている。明代では泰山信仰と結びつき、太和山の真武神信仰（前掲注「玄岳」参照）と双璧をなしており、霊験あらたかな神籤は特に有名であったという。
○黄帝　古代の五帝の一。道教においても神として尊崇され続けた。
○蛻骨　肉体を脱して昇仙すること。
○傅粉　白粉をつける。
○鬣　動物のたてがみ。ここでは松の葉の比喩。
○西門　密県城の西門。ここから登封県への道のりについて「密県志」（巻五彊域志）に「西南路　〔八里〕石寨溝〔三里〕偏橋崗〔九里〕平陌集〔三里〕界河、抵登封界。距城、積二十三里許」とある。現在のルートもほぼこれをなぞるが、徐霞客もこの道を通ったのであろう。
○登封界　登封県の境域。
○耿店　徐名山注は、密縣の西南、登封の東北にあるとし、朱恵栄は、今の盧店であるという。
○石淙　石淙河の半ばにある名勝の地。次節で詳述する。
○税駕　車馬を停止すること。宿泊すること。

●口語訳

［二月十九日］

［河南開封府滎陽県域］

《1》黄宗店から密県へ

十九日かかって、河南省鄭州の黄宗店に至った。まちの右から石畳の坂を上り、聖僧池を鑑賞する。清らかな水を湛えた池が、緑なす山の半ばに留まっている。山から見下ろせば、深い谷川が縦横に伸びて重なりあっているが、一滴の水もない涸れ谷である。斜面を下って涸れ谷の底を進み、香爐山に沿って、曲がりながら南へ向かう。香爐山の形は、三つの峯が聳える様が鼎を逆さまに伏せたかのようで、たくさんの山々がこれを取り囲んでおり、その美しい様は見る人をして喜ばせるものがある。谷底は、乱立する石でいっぱいで、紫の玉の如き姿を現している。両側は石の壁がうねうねと続いているが、その膚はやや精密で湿潤な感じがする。ここを清流があふれ流れていたときのことを想起してみると、泡立つ水しぶきが珠玉のように輝き、黛のように青々とした淵が満々と水を湛えていたのであろう。どのようなすばらしい景色だったのだろう。

十里進み、石仏嶺を登り越える。

［河南開封府密県域］

さらにまた五里で、密県の県域に入る。遙か嵩山を望むに、まだ六十里以上もある。分かれ道から東南に二十五里進み、密県城を通り過ぎて、天仙院に至る。

《2》天仙院

この院には天仙を祀っている。天仙とは黄帝の三女である。白い松が、祠の後ろの中庭に立っている。言い伝えによれば、天仙がここで肉体を脱して昇仙したとのことである。松は大人で四抱えほどもあり、根本はひとつなのが三つの幹に分かれ、それぞれが空に向かって雲に入らんばかりに伸びている。樹皮はなめらかでまるで脂肪を凝らした如く、白

粉で装ったような美しさがある。枝は龍のように曲がって蟠り、馬のたてがみのような緑の葉は風に舞い、頭をあげ、胸を張るように、天空へ向かってすっくと美しく立っている。誠にすばらしい景観である。松を石の欄干が取り巻いている。北に一棟の長廊が延びており、そこには詩や聯を記したものがたくさん並んでいる。しばらくそこを参観したのち、下の方へ下り、滴水を見る。渓流はここで急に下へ落ち込んでおり、崖がその上を覆い、水が落下する音が聞こえる。

《3》密県から登封県域へ

密県城に引き返し、さらに西門に至る。

[河南河南府登封県域]

そこから三十五里進み、登封県の県域に入る。ここは耿店という。ここから南へ向かうのが石淙への道である。今日はここに泊まることとする。

◆耿店に泊。

【二月二十日】

＊概要：南へ下り、嵩山八景の一つ「石淙会飲」の地である石淙へ。のち告成鎮を経て、中岳廟へ。日が既に落ちかかっていたが、それを押して盧巖寺へ登る。中岳廟に泊。

■本文の部

二十日　從小徑南行。二十五里、皆土岡亂壟。久之、得一溪。渡溪、南行岡脊中。下瞰則石淙在望矣。余入自大梁、平衍廣漠、古稱「陸海」、地以得泉爲難、泉以得石尤難。近嵩始睹蜿蜒衆峯、於是北流有景・須諸溪、南流有潁水、然皆盤伏土磧中。獨登封東南三十里爲石淙、乃嵩山東谷之流、將下入於潁。一路陂陀屈曲、水皆行地中、到此忽逢怒石。石立崇岡山峽間、有當關扼險之勢。水沁入脅下、從此水石融和、綺變萬端。繞水之兩崖、則爲鵠立、爲雁行。踞中央者、則爲飲兕、爲臥虎。低則嶼、高則臺、愈高、則石之去水也愈遠。乃又空其中而爲窟、爲洞。揆崖之隔、以尋尺計、竟水之過、以數丈計、水行其中、石峙於上、爲態爲色、爲膚爲骨、備極妍麗。不意黄茅白葦中、頓令人一洗塵目也。

登隴、西行十里、爲告成鎮。古告成縣地。測景臺在其北。西北行二十五里、爲岳廟。入東華門時、日已下舂。余心豔盧巖、即從廟東北循山行。越陂陀數重、十里、轉而入山、得盧巖寺。寺外數武、即有流鏗然、下墜石峽中。兩旁峽色、氤氳成霞。溯流造寺後、峽底矗崖、環如半規、上覆下削。飛泉隨空而下、舞綃曳練、霏微散滿一谷、可當武彝之水簾。蓋此中以得水爲奇、而水復得石、石復能助水、不尼水、又能令水飛行、則比武彝爲尤勝也。徘徊其下、僧梵音以茶點餉、急返岳廟、已昏黑。寺外數武、即有流鏗然、下墜石峽中。兩旁峽色、氤氳成霞。溯流造寺後、峽底矗崖、環如半規、上覆下削。飛泉隨空而下、舞綃曳練、霏微散滿一谷、可當武彝之水簾。蓋此中以得水爲奇、而水復得石、石復能助水、不尼水、又能令水飛行、則比武彝爲尤勝也。徘徊其下、僧梵音以茶點餉、急返岳廟、已昏黑。

■訳注の部

●訓訳

二十日　小徑に從ひて南に行く。二十五里、皆な土岡亂壟たり。之を久しくして、一溪を得。溪を渡りて、南に岡脊の中を行く、下を瞰れば則ち石淙望に在り。

余　大梁より入れば、平衍廣漠にして、古へ「陸海」と稱す。地は泉を得るを以て難しと爲し、泉は石を得ること尤も難し。嵩に近づきて始めて蜿蜒たる衆峯を睹る。是において北流には景・須の諸溪有り、南流には潁水あり。然して皆な土磧の中に盤伏せり。獨り登封の東南三十里は石淙たりて、乃ち嵩山東谷の流にして、將に下りて潁に入らんとす。一路陂陀屈曲して、水は皆な地中を行けり。此に到りて忽ち怒石に遭ふ。石は崇岡と山峽との間に立ちて、關に當り險を扼するの勢ひ有り。水は沁みて脅下に入り、此より水石融和して、綺變萬端たり。

水を繞る兩崖は、則ち鵠の立てるとなり、雁の行けるとなる。中央に踞する者は、則ち飲める兕たり、臥せる虎たり。低きは則ち嶼たり、高きは則ち臺たり。愈々高ければ、則ち石の水を去るや愈々遠し。乃ち又た其の中を空にして窟となり、洞となる。崖の隔を揆するに、尋尺を以て計り、水の過を竟ふれば、數丈を以て計る。

水　其の中を行き、石　上に峙す。態たるや色たるや、膚たり骨たりて、妍麗を備極せり。意はざりき、黄茅白葦の中に、頓に人をして一たび塵目を洗はしむるとは。

隴に登り、西に行くこと十里にして、告成鎮たり。古への告成縣の地なり。測景臺　其の北に在り。

西北に行くこと二十五里にして、岳廟たり。東華門に入りし時、日已に下舂たり。余心に盧巖を豔とすれば、即ち廟の東北より山に循ひて行く。陂陀數重を越え、十里にして、轉じて山に入り、盧巖寺を得たり。

寺の外　數武にして、即ち流れの鏗然として、下に石峽中に墜つる有り。兩旁の峽の色は、氤氳　霞を成す。流れを溯りて寺の後ろに造る。峽底矗崖にして、環すること半規の如く、上に覆ひ下は削らる。飛泉　空に隨ひて下り、舞綃　練を曳き、霏微　一谷に散滿たり。武彝の水簾に當るべし。蓋し此の中は水を得るを以て奇となす。而して水は復た石を得、石も復た能く水を助く。水を尼せず、又た能く水をして飛行せしむれば、則ち武彝に比するに尤も勝れりとなすなり。其の下を徘徊するに、僧梵音の茶點を以て餉す。急ぎ岳廟に返るに、已に昏黑たり。

●語注

○土岡　あまり高くない高地。丘。

○壟　耕地の畦。転じて細長い微高地。

○石淙　石の上を水が流れるさまをいうが、ここでは固有名詞。屹立する岩の間を清流がさらさらと流れる景勝の地で、唐代には、洛陽を根拠地としていた則天武后の避暑地となり、久視元年（七〇〇）には離宮の三陽宮が建てられた。同年には、群臣をともなって詩会を行い、武后やその息子の後の睿宗・中宗、武三思・張兄弟・狄仁桀ら十七名による宴（石宗会飲）が開かれ、連作の作品「夏日遊石淙詩」が作られている。同作品は石宗河畔の岩に彫られ、現存する。さらにその後の訪問者の作品も磨崖碑として残されている。しかし、近年は周囲が石炭の採掘場として開発され、流水は石炭紛がまじって汚損され、清流とは到底言いがたい状況にある。工場群が林立するただ中にあってすっかり荒れ果て、放置され、忘れ去られている（二〇一〇年九月確認）。

○大梁　開封の古名。
○泉　泉水。河川のこと。
○景　景渓。
○須　須渓。
○穎　穎水。
○盤伏土磧中　磧は、じゃり、堆積物。土や砂利などが堆積していて、その間を河川が流れており、岩や岩盤が露出していない様をいうと解した。
○一路　徐霞客が通っている道筋と解した。あるいは、河川のことか。
○地中　河川が地下に潜っているのではなく、堆積物を削りながら流れていて、陸地面から下位にあることをいうのであろう。
○崇岡　高い岡。ここでは険しく聳える岸辺であろう。
○山峽　山に挟まれた峡谷。
○揆　測る、推測する。
○尋尺　尋は八尺。熟語では、短い距離を表す。
○竟水之過　徐名山注は「竟水」で切り、最高水位、と取る。湯注は、竟を最後まで（はかり）終える、と取り、川の流域の幅とする。つまり、「揆崖之隔」はある地点での川幅（直線距離）であるが、「竟水之過」は蛇行する流れの両端の最も幅の広いところをいうのだとする。一応、湯注に従って訳した。
○丈　十尺。
○黄茅白葦　ごく普通の水辺のことか。
○告成鎮　登封県内。今も同じ。周代の穎邑。戦国期には鄭に属し、陽城といった。秦末挙兵した陳勝はここの出身という。のち、陽城県や陽城郡府であったが、唐の武則天が嵩山で封禅を行った際、告成県となった。のち、登封県に属する鎮の扱いとなる。
○測景臺　周公が洛陽建都の際に、時間と距離を測るのに立てたと伝える。今は台はなく、そのことを記した石碑が立つのみ。ただ、その近くには、元代の郭守敬らが建てた、観星台という天文施設が残る。
○岳廟　中岳嵩山を祭る中岳廟。創建は漢の武帝に遡るとされ、歴代皇室により尊崇され続けた。現存するものは清代の修築を経ているが、五岳の廟として古代からの形をほぼ原型通り留める。ここを中心とした嵩山の建築群は、二〇一〇年に、世界遺産に登録された。登録名は「天地之中」。
○東華門　中岳廟の東門。
○下舂　舂は穀物をそこへ投じて脱穀する道具。下舂で、日が落ちること、またその頃。
○盧巖　盧巖寺。唐代に盧鴻一という隠者が隠棲していたという。
○豔　羨望する、慕う。
○鏗然　音の響く様。ここでは瀧の音。
○流　いわゆる盧巖瀑布。
○氤氳　小さい水滴が弥漫している様。
○半規　半円形。
○綃、練　彩絹。
○武彝之水簾　武彝は武夷山。福建省の名山。水簾洞は「山中最勝之境」と称される名勝。

数十㍍のドーム型の洞窟をなし、頂上から泉水が降り注いでいる。
○尼　阻む。
○梵音　盧巌寺の僧侶の名前だと思われるが、不詳。

●口語訳

［二十日］

《4》景勝地石淙

小道に沿って南へ進む。二十五里の間、丘や不規則な高地が続く。しばらくして、小川に行き当たる。これを渡り、更に南に、丘の尾根を進む。そこから下を俯瞰すれば、石淙が見渡せた。

私は開封の方からやって来たので、この間の土地は平らで広々としており、古来より「陸海」と称されるのもよくわかった。平地の上には、河川があまりなく、あったとしても岩石があるものではなかった。それが嵩山に近づいて来て初めて、うねうねと起伏のある山々を見ることになった。かくして北流するものには景渓や須渓などの諸渓があり、南流するものに潁水がある。ただしこれらの諸河川は、いずれも土や砂利などの堆積物の間をうねうねと巡りながら流れている（のであまり見えない）。その中で、登封県の東南三十里のこの石淙は、嵩山の東の谷からの流れが、下って潁水に合流しようというあたりである。ここまで道筋は高低があり、くねくねと曲がっていたが、河川はどこでも陸地面から下位にあった。それがここに至って、流れが湧き上がるような岩々にぶちあたることになっている。それらの巨石群は、高い岸辺と深い谷の間に聳え立ち、一夫が関所や枢要の地を守っているかのような赴きである。川の水は、それらの巨石の根元あたりに至って沸き立っており、ここから水と石とが融和した世界が始まり、その美しさは様々な変化を見せている。

川の水を巡る両岸の崖は、あるいはカササギが屹立するかのよう、また雁が並び飛んでいるかのよう。水中にわだかまる巨石は、あるいは水を飲む水牛のよう、また伏せる虎のよう。低く小さいものは小島をなし、高く大きいものは平らな台をなす。石が大きくなれば、それだけ水面から高く遠ざかる。更にまた、その岩の中空には穴が穿たれ、石窟や石洞をなしているものもある。石と崖との距離を測ってみれば、わずか八尺ほどしかないが、蛇行する川の両端の最高距離を測れば、数十尺もある。

水が渓谷の中を流れ、石がその上に屹立している。石の姿は露出した骨のようであり、それに注ぐ水の流れは、骨を覆う皮膚のようであり、水と石とが調和した美しい景観を窮め尽くしている。全く予想もしなかったことだ、茅や葦の茂る水辺にあって、一瞬で眼の塵埃を洗い流すような、すばらしい光景に出会えるとは。

《5》告成鎮から中岳廟・盧巌寺へ

高い丘に登り、西に十里行くと告成鎮である。ここは昔の告成県の場所である。測景台がまちの北にある。

西北に二十五里行くと、中岳廟である。廟に東華門から入ったとき、既に太陽は沈もうとしていた。しかし、私は盧巌寺へ行くことを渇望していたので、すぐさま廟の東北へ山沿いの道を登っていった。幾重ものアップダウンがある山路を十里ばかり行き、転じて山に入ると盧巌寺に行き着いた。

盧巖寺を数歩出ると、ごうごうと音を響かせながら、せばまった石の間を落ちる瀧があった。両岸の峡谷の様は、水蒸気が充満していて、霞に被われているかのよう。瀧の流れを遡って寺の後ろ側へ行く。そこは谷底から崖がそそり立っていて、前面を半円形に取り巻き、上から覆い被さるようにのしかかって、下の方は削られて引っ込んでいるかの如くである。流れ落ちる瀧の水は、空を飛んで落ちてきて、美しい彩絹が舞い、たなびいているかのようであり、細かな飛沫が谷中に充満している。その様は、武夷山の水簾洞にも劣らないものがある。ここでは水を得ることで奇勝をなしている。そして水はさらに岩石を得ることでよくなり、岩石も水のよさを助けている。水のよさを妨げることなく、さらに水を飛ばしているわけで、つまり武夷山よりも優れていると言えるのではないか。瀑布の下を徘徊していると、盧巖寺の梵音和尚が、お茶と点心でもてなしてくれた。（その後）急いで中岳廟に戻ったが、既に夜も更けていた。

◆中岳廟に泊。

【二月二十一日】

＊中岳廟から太室山に登る。老練な樵夫をガイドに雇い、スリルを味わいながら山中を巡る。下りは、南下する正道ではなく、険峻な西まわりの道で降り、法皇寺に泊。ただし、悪天候で景色は見えなかったようだ。訳注は三部に分けた。

■本文の部

二十一日　晨、謁岳帝。出殿、東向太室絶頂。按嵩當天地之中、祀秩排列次序爲五嶽首、故稱嵩高、與少室並峙、下多洞窟、故又名太室。兩室相望如雙眉、然少室嶙峋、而太室雄厲稱尊、儼若負扆。自翠微以上、連崖横亙、列者如屏、展者如旗、故更覺巖巖。崇封始自上古、漢武以嵩呼之異、特加祀邑。宋時逼近京畿、典禮大備。至今絶頂、猶傳鐵梁橋・避暑寨之名。當盛之時、固想見矣。

太室東南一支、曰黄蓋峯。峯下即岳廟。規制宏壯。庭中碑石矗立、皆宋・遼以來者。登岳正道、乃在萬歳峯下、當太室正南。余昨趨盧巖時、先過東峯、道中見峯巒秀出、中裂如門、或指爲金峯玉女溝、從此亦有路登頂、乃覓樵預期爲導、今遂從此上。近秀出處、路漸折。避之、險絶不能徑越也。北就土山、一縷僅容攀躋、約二十里、遂越東峯、已轉出裂門之上。西度狹脊、望絶頂行。是日濃雲如潑墨、余不爲止。至是嵐氣愈沉、稍開則下絶壁重崖、如列綃削玉、合則如行大海中。五里、抵天門。上下皆石崖重疊、路多積雪。導者指峻絶處爲大鐵梁橋。折而西、又三里、繞峯南下、得登高巖。凡巖幽者多不暢、暢者又少廻藏映帶之致。此巖上倚層崖、下臨絶壑。洞門重巒擁護、左右環倚臺嶂。初入、有洞岈然、洞壁斜透。穿行數武、崖忽中斷五尺、莫可著趾。導者故老樵、狷捷如猿猴、側身躍過對崖、取木二枝、横架爲閣道。既度、則巖穹然上覆、中有乳泉・丹竈・石榻諸勝。從巖側躋而上、更得一臺。三面懸絶壑中。導者曰、「下可瞰登封、遠及箕・潁。」時濃霧四塞、都無所見。出巖、轉北二里、得白鶴觀址。址在山坪、去險就夷、孤松挺立有曠致。又北上三里、始躋絶頂。有眞武廟三楹。側一井、甚瑩、曰御井、宋眞宗避暑所濬也。

飯眞武廟中。問下山道、導者曰、「正道從萬歳峯抵麓二十里。若從西溝懸溜而下、可省

其半。然路極險峻。」余色喜。謂嵩無奇、以無險耳。亟從之、遂策杖前。始猶依巖凌石、披叢條以降。既而從兩石峽溜中直下、仰望夾崖逼天。先是峯頂霧滴如雨、至此漸開、景亦漸奇。然皆垂溝脱磴、無論不能行、且不能止。愈下、崖勢愈壯、一峽窮、復轉一峽。吾目不使旁瞬、吾足不容求息也。如是十里、始出峽、抵平地、得正道。過無極洞。西越嶺、趨草莽中、五里、得法皇寺。寺有金蓮花、爲特産、他處所無。山雨忽來、遂借榻僧寮。其東石峯夾峙、毎月初生、正從峽中出、所稱「嵩門待月」也。計余所下之峽、即在其上。今坐對之、只覺雲氣出沒、安知身自此中來也。

■訳注の部

[その一]

●訓訳

二十一日　晨に、岳帝に謁す。

　殿を出で、東より太室の絶頂に向かふ。按ずるに、嵩は天地の中に當りて、祀秩の次序は五嶽の首たり、故に嵩高と稱す。少室と並び峙し、下に洞窟多し、故に又　太室と名す。兩室の相望むこと雙眉の如し、然して少室は嶙峋にして、太室は雄厲にして尊と稱し、儼たること辰を負ふが若し。翠微より以上、連崖横亙し、列する者は屏の如く、展する者は旗の如し、故に更に巖巖を覺ゆ。崇封は上古より始まり、漢武は嵩呼の異を以て、特に祀邑を加はふ。宋の時は京畿に逼近にして、典禮大いに備はる。今に至るに絶頂に、猶ほ鐵梁橋・避暑寨の名を傳ふ。當盛の時、固より想見せん。

●語注

○東　中岳廟は太室山の東端にある。よってここは「東から」と解した。

○太室　嵩山は大きく分けて、東西に横たわる山塊である太室山と、その西端から南北に横たわる山塊の少室山からなる。それぞれに多くの峯がある。

○天地之中　五岳の中心の中岳ゆえ、世界の中心となる。前述の通り、世界遺産の登録名もこれである。

○嵩高　嵩山は嵩高山とも称される。

○嶙峋　山や谷が重なり遭っている様。

○嵩呼之異　元封元年（前一一〇）の嵩山祭祀の際、武帝に随行した臣下達が、どこからともなく「万歳」の声を聞いたという。これを奇瑞と見た武帝は、嵩山への尊崇をより高くし、嵩山の南麓に、神を祀るための、三百戸の邑を創設した。これが嵩高邑というまちで、のちの登封市である。

○鐵梁橋　後出するが、中腹に聳える一対の岩。峡谷をはさんで両側から石板が斜めに突き出しているという。

●口語訳

[二十一日]

《6》太室山概説

　早朝に、中岳廟に参る。

　大殿を出て、東から太室山の頂上へ向かう。思うに、嵩山は「天地之中」と称されると

ころにあたっていて、祭りの等級としては五岳のトップである、だから「嵩高」と称される。少室山と対峙しており、山下には洞窟が多くある。そこで「太室」とも呼ばれている。この両室山が向かい合っている様は、まるで一対の眉のようであるが、少室山がでこぼこと高低があるのに対し、太室山は雄々しくすっくと聳えていて、自らの高い位を誇っているようであり、その厳めしさは屏風を背負って諸侯を謁見する帝王の趣がある。緑がかった山脚より上は、連綿と崖が途切れることなく横たわり、並んだ屏風や伸展された旗のようである。そこでことさらに厳めしさを感じ取るのだろう。嵩山が尊崇され封建されるのは上古よりであり、漢の武帝は「万歳」の声が起こったという奇瑞により、新たに祭祀都市を建設した。宋の時代は、首都の開封に近かったこともあって重視され、祭祀の典礼が完備された。今でも、嵩山の頂上には、鉄梁橋・避暑寨の名が伝わっている。これにより、最盛期の様が想起されるであろう。

［その二］

●訓訳

太室の東南に一支あり、黄蓋峯と曰ふ。峯下は即ち岳廟なり。規制宏壮なり。庭中に碑石矗立す。皆な宋・遼以來の者なり。

岳に登るの正道は、乃ち萬歳峯の下に在りて、太室の正南に當る。余　昨に盧巖に趨きし時、先ず東峯を過ぎ、道中に峯巒の秀出するを見る。中ごろ裂けること門の如く、或ひと指して金峯玉女溝となし、此よりも亦た路の頂に登る有りと。乃ち樵を覓めて預め期して導となす。今　遂に此より上る。秀出するの處に近づくに、路　漸く折る。之を避けんとするに、險絶にして徑ちに越ゆる能はざるなり。北のかた土山に就くに、一縷の僅に攀躋を容るるあり。約二十里にして、遂に東峯を越ゆ。已に轉じて裂門の上に出づ。西のかた狹脊を度り、絶頂を望みて行く。

是の日　濃雲　墨を潑するが如きも、余　爲めに止めず。是に至りて嵐氣愈々沉みて、稍く開けば則ち下に絶壁重崖の、綃を列ね玉を削るが如きを瞰る。合すれば則ち大海の中を行くが如し。

五里にして、天門に抵る。上下皆な石崖重疊として、路は多く雪を積む。導びく者、峻絶の處を指さして大鐵梁橋となす。折れて西し、又　三里にして、峯を繞りて南に下り登高巖を得たり。凡そ巖の幽なる者は暢せざる者多く、暢する者は又　廻藏映帶の致　少なし。此の巖は上は層崖に倚り、下は絶壑に臨む。洞門は重巒擁護し、左右は臺嶂に環り倚る。

初めて入るに、洞の岈然たる有り、洞壁斜透せり。穿行すること數武にして、崖は忽ち中斷して五尺なり、趾を著くべきなし。導びく者は故老の樵にして、狷捷なること猿猴の如く、身を側だてて躍りて對崖を過ぎ、木二枝を取りて、横架して閣道となす。既に度れば、則ち巖の穹然として上に覆ひ、中には乳泉・丹竈・石榻の諸勝有り。

巖側より躋みて上れば、更に一臺を得。三面　壑中に懸絶たり。導びく者の曰はく、「下は登封を瞰るべし、遠きは箕・潁に及ぶ」と。時に濃霧四塞し、都て見る所無し。巖を出で、轉じて北に二里にして、白鶴觀の址を得。址は山坪に在り、險を去りて夷に就き、孤松挺立して曠致有り。

又　北に上ること三里にして、始めて絶頂を躋む。眞武廟三楹有り。側に一井あり、甚

だ瑩なり、御井と曰ふ。宋眞宗の暑を避けて濬する所なり。

●語注

○黄蓋峯　太室三十六峯の一。最も東端にある。海抜八八〇㍍の小山。
○碑石　中岳廟には、百を超える石碑が現存するが、北魏時代のものと思われる「中岳嵩高霊廟之碑」には徐霞客は言及していない。
○遼　徐名山注は、金元の誤りではないかという。徐霞客が書に興味がないわけはないが、中岳廟における石碑の叙述は実にそっけない。
○萬歳峯　太室三十六峯の一。海抜九百九十八㍍。漢の武帝が訪れたとき、この峯のあたりから「万歳」の声が聞こえたことにちなむ命名だという。
○東峯　黄蓋峯のこと。
○金峯玉女溝　嵩山東南の谷のひとつ。
○折　折れる、あるいは絶っている。
○天門　嵩門ともいう。桂輪峯の頂に聳える岩が、半円形で欠けており、門のように見える。仲秋のころ、山麓の法王寺からここを眺めると、満月がそこから登り、あたかも玉鏡を嵌めたかのように見える。そこから中岳八景の第一として「嵩門待月」がある。宋之問に「天門歌」がある。
○峯　どの峯か不詳。
○登高巖　高登崖・棲静崖ともいう。巨大な岩のかたまりで、南側の崖に洞窟がある。
○暢　暢通。滞ることなく通る。のびやかな様。
○廻藏映帯　徐名山注によれば、曲がり、隠し、映え合う。今ひとつよく分からない。
○洞　「説嵩」では石室といい、「登封市志」では嵩山洞・二仙洞という。
○乳泉　「説嵩」にあり、巖の上に水が浸みだしているという。
○丹竈　「説嵩」に丹竈盆とあり、乳泉の水がたまった窪み。
○石榻　不詳。
○箕　箕山。
○潁　潁水。
○白鶴観址　「説嵩」によれば、周代の神仙李八百が煉薬していたところ白鶴が集まってきたことからの命名、また浮丘伯が王子晋とこもり白鶴に乗って昇仙したことにちなむともいう。
○曠致　ひろびろ、清らかな趣き。
○真武廟　真武君を祀る廟。「嵩書」に玄帝廟があり、玄亀峯の上にあって、天池・玉井があるという。
○御井　不詳。「嵩書」「説嵩」の玉井か。
○宋眞宗　北宋三台皇帝、趙垣（九六八～一〇二二、即位九九七）。大中祥府元年（一〇〇八）、泰山で封禅を行っている。
○濬　井戸を掘ること。

●口語訳

《7》太室山に登る―黄蓋峯・天門峯・登高巖・白鶴観跡・頂上真武廟

太室山の東南に延びる支脈があり、その端を黄蓋峯という。その峯の麓が中岳廟になる。廟は規模が広々として壮観である。庭中には石碑が多く立っているが、いずれも宋・遼以来のものである。

太室山に登る本道は、万歳峯の下にあって、太室山の真南に当たる。私は昨日、盧巖寺に行ったとき、先ず黄蓋峯（の側）を通り過ぎたが、その道中で秀でた峯を見た。それは中程から門のように裂けており、ある人が「金峯玉女溝」だといい、ここからも頂上に登る路があると教えてくれた。そこで樵夫を傭い、ガイドとして案内してもらうよう手配をしておいた。そして今、その道から登るのである。峯の秀でているところに近づいていくと、道が次第に切れ切れとなってきた。そこを避けようとするが、険しく切り立っていてそのまま越えることはできない。そこで北へ向かい土の山に取り付いてみれば、やっと登る手がかりを得られるほどの小道があった。二十里ばかりも進んで、ようやく黄蓋峯を越えた。そこは先に見た金峯玉女溝の上に出ていた。西へと狭い尾根道を越え、絶頂を目指して進む。

この日は濃い雲が墨を散らし塗ったようであったが、私は山行をやめなかった。それがこのころになって山中の霧が少し沈静し、やや開けると眼下に彩絹を連ねたり、玉を削ったような、重なる絶壁が見えたが、また霧が合わさると大海の中を行くのと同じような状態になった。

五里で天門峯に至った。その上の方も下の方も、重なる石の崖が続いており、路には多く雪が積もっている。ガイドが最も険峻なところを指さして、大鉄梁橋だと教えてくれる。そこから折れて西に三里行き、峯を廻って南に下ると登高巖である。いったい幽深さを帯びた岩はすっきりとしていないものが多いし、すっきりとした岩は曲がったり、ぼんやりとしていたり、それぞれが映え合うという趣を持ったものは少ない。しかしこの岩は、上は重なる崖によりかかり、下は絶壁に臨んでいる。また開いた洞窟の門は重なる山々が守っており、左右には台や屏風のような峯々が取り巻いている。

岩のあたりに入ると、深く大きな洞窟がある。洞窟は斜めに口を開いている。数歩入ってみると、崖が突然途切れて五尺ばかりの穴が出現した。足を置く間もないほどである。ガイドは古老の樵夫であるが、その身の軽さは猿のようで、体を傾けて躍り上がって対岸に飛びつき、そこにあった二本の木の枝を取って、臨時の橋としてくれる。そこを渡ると、ドームのような岩が上からのしかかってきて、その中に乳泉・丹竈・石榻などの名勝があった。

登高巖の側らからよじ登ると、またひとつの平台があった。谷の中に突き出していて、三面が空に懸かっているかのような絶壁である。ガイドが言うには「ここから下へは登封県城が見え、遠くは箕山や潁水が見える」と。しかしこの時は濃霧があたりに立ちこめ、全く何も見えなかった。巖を離れ、転じて北に二里で白鶴観の址に出た。そこは山の窪地にあって、険峻なところからは離れていて、平らな場所であり、一本の松がすっくと立っていて、ひろびろとした清らかな趣があった。

また北に三里登り、やっと頂上を極めた。三棟からなる真武廟があった。側らに井戸があった。水は甚だ清らかで透明である。御井と言う。宋の真宗が避暑で訪れた際、掘らせたものだという。

[その三]

●訓訳

眞武廟中に飯す。下山の道を問ふに、導びく者の曰はく、「正道は萬歳峯よりして麓に抵るは二十里なり。若し西溝より懸溜して下れば、其の半を省くべし。然れども路は險峻を極めん」と。余　色喜ぶ。謂ふ、「嵩に奇無きは、險無きを以てなるのみ」と。亟に之に從ひ、遂に杖を策つきて前む。始めは猶ほ巖に依り石を凌ぎ、叢條を披きて以て降る。既にして兩石の峽溜せる中より直ちに下り、仰ぎて夾崖の天に逼るを望む。是より先、峯頂　霧滴　雨の如し。此に至りて漸く開け、景も亦た漸く奇なり。然れども皆な垂溝にして磴を脱し、行く能はざるは論無く、且つ止まること能はず。愈々下れば、崖勢愈々壯にして、一峽窮まれば、復た轉じて一峽あり。吾が目旁瞬せしめず、吾が足求息を容れざるなり。是の如きこと十里にして、始めて峽を出で、平地に抵り、正道を得。

無極洞を過ぐ。西して嶺を越え、草莽の中を趨ること、五里にして、法皇寺を得。寺に金蓮花有り、特産たり、他處に無き所なり。山雨忽ち來る、遂に榻を僧寮に借る。其の東に石峯夾峙し、月の初めて生るる毎に、正に峽中より出づ。所稱「嵩門待月」なり。計るに余の下りし所の峽は、即ち其の上に在り。今　坐して之に對すれば、只だ雲氣の出沒するを覺る、安んぞ身の此の中より來るを知らんや。

●語注

○懸溜　一般には、小さな瀧や軒先からのほとばしりのような小規模な急な流れ。湯注はこれに従う。「西の谷の小さな渓流沿いに下る」の訳となろう。徐名山注は「高い所から滑り降りる」ことと言い、朱恵栄もこれに従う。本稿もこれに従う。

○不能行　進むことができないでは意味が通じがたい。自分の意のままには進めない、ということか。

○無極洞　「嵩書」に象極洞・鶏卵洞・老君洞、「説嵩」には鶏卵洞の名を伝え、今は老母洞・無極洞ともいう。唐代に潘師正が穿ったと伝える。

○法皇寺　法王寺。漢の明帝時代の創建と伝える古刹だが、おそらく仮託。北魏には存した。

○金蓮花　黄金の色をした蓮華なのであろうか。

○榻　長椅子。借榻で、一休みさせてもらうこと。

●口語訳

《8》太室山を降る

真武廟で昼食を取った。下山の道筋を問うと、ガイドが言うには「本道は万歳峯から麓に至るもので、二十里である。もし西の谷を滑り降りれば、路程は半分にできる。けれども路は険峻を極めている」と。私はうれしくなった。というのは、「嵩山に奇勝が少ないのは、険峻の地が少ないから」と思っていたからだ。（だから険峻の地を得られれば奇勝もまた得られると考えた。）そこで速やかにその道を選び、杖をつきながら進むこととした。始めはまだ岩に取り付き、石を踏み、密集した藪を開きながら下る程度であった。まもなく両側から石が迫っている間を真っ直ぐ下り始め、振り返って仰ぎ見れば、両側の崖壁が天を被い塞がんかという様である。これまでは、峯の頂上では霧の滴が雨のように垂

れ込めていた。それがここに至って次第に開け、景色もだんだんとその奇異さを表してきた。けれどもずっと、急ですべり易い溝が続いていて、階段のような足がかりになるものはなく、自分でコントロールしながら進めないのはもちろんのこと、立ち止まることもできない。下れば下る程、崖の形勢はいよいよすごいものとなり、ひとつの峡谷を窮めたと思ったら、また次の峡谷が始まっているありさまである。あたりを見回す余裕はなく、一瞬たりとも足を止めることもできない。こんな調子が十里続き、やっと峡谷を抜けて、平地に至って、本道に出た。

《9》太室山―法王寺

無極洞を通り過ぎる。西へ向かって山嶺を越え、草ぼうぼうの中を足を急がせること五里にして、法王寺に至った。寺には金蓮花があり、特産で、他所には無いものである。雨が急に降ってきた。そこで僧人の小屋で雨宿りをする。東の方に石の峯が門のように向かい合って聳えているのが見えるが、新月の度に、その門の間から月が昇るのである。これが、嵩山八景のひとつ「嵩門待月」である。振り返るに、私が下ってきた峡谷は、見えている峡谷の上にあたる。今、麓で座って眺めてみると、ただ雲気が出入りしているだけのように見え、我が身がそこから降りてきたことなど想像のしようもないほどだ。

◆おそらく法王寺に泊。

【二月二十二日】

＊太室山南麓に展開する嵩陽宮址などを参観し、一旦中岳廟へ戻る。昼食を取った後、西へ向かい、登封県城を通り過ぎて、郭店から西南に折れ、少林寺に入って泊。

■本文の部

二十二日　出山、東行五里、抵嵩陽宮廃址。惟三將軍柏鬱然如山、漢所封也。大者圍七人、中者五、小者三。柏之北、有室三楹、祠二程先生。柏之西、有舊殿石柱一、大半沒於土、上多宋人題名、可辨者爲范陽祖無擇・上谷寇武仲及蘇才翁數人而已。柏之西南、雄碑傑然、四面刻蛟螭甚精。右則爲唐碑、裴迴撰文、徐浩八分書也。

又東二里、過崇福宮故址、又名萬壽宮、爲宋宰相提點處。又東爲啓母石、大如數間屋、側有一平石如砥。又東八里、還飯岳廟。看宋・元碑。西八里、入登封縣。西五里、從小徑西北行。又五里、入會善寺、「茶榜」在其西小軒内、元刻也。後有一石碑仆牆下、爲唐貞元『戒壇記』、汝州刺史陸長源撰文、河南陸郢書。又西爲戒壇廃址、石上刻鏤極精工、俱斷委草礫。西南行五里、出大路。又十里、至郭店。折而西南、爲少林道。五里、入寺、宿瑞光上人房。

■訳注の部

●訓訳

二十二日　山を出で、東に行くこと五里にして、嵩陽宮の廃址に抵る。惟だ三將軍柏のみ鬱然として山の如し。漢の封ぜし所なり。大なる者は圍七人にして、中なる者は五、小なる者は三なり。柏の北に、室の三楹なる有り、二程先生を祠る。柏の西に、舊殿の石柱

一有り、大半は土に没す。上に宋人の題名多し、辨ずべき者は范陽の祖無擇・上谷の寇武仲及び蘇才翁ら數人のみ。柏の西南には、雄碑傑然たりて、四面に蛟螭を刻せること甚だ精なり。右は則ち唐の碑たり、裴迥文を撰し、徐浩八分にて書せり。

又　東に二里にして、崇福宮の故址を過ぐ、又　萬壽宮と名す、宋の宰相提點の處たり。

又　東すれば啓母石たり、大なること數間の屋の如し、側に一平石の砥の如き有り。

又　東に八里にして、還りて岳廟に飯す。宋・元の碑を看る。

西に八里にして、登封縣に入る。

西に五里にして、小徑より西北に行く。

又　五里にして、會善寺に入る。「茶榜」其の西の小軒の内に在り、元刻なり。後ろに一石碑の牆下に仆れる有り、唐の貞元の「戒壇記」たり。汝州刺史の陸長源　文を撰し、河南の陸郢　書す。

又　西すれば戒壇廢址たり、石上の刻鏤　精工を極む、俱に草礫に斷委せり。

西南に行くこと五里にして、大路に出づ。

又　十里にして、郭店に至る。折れて西南すれば、少林の道たり。

五里にして、寺に入る。瑞光上人の房に宿す。

●語注

○嵩陽宮廢址　現在嵩陽書院があるところ。ここは北魏太和八年（四八四）に嵩陽寺が創建される。「洛陽伽藍記」巻五末に「嵩高中有間居寺・棲禅寺・嵩陽寺・道場寺。上有中頂」とある。隋大業八年（六一二）には嵩陽観という名の道教施設に変わり、唐高宗の弘道元年（六八三）には皇帝の行宮ともなっている。五代期には講学の場ともなり、後唐顕徳二年（九五五）には、太乙書院と命名された。宋至道三年（九九七）には太室書院の額を賜与され、景祐二年（一〇三五）に嵩陽書院の名を賜った。宋代には、後述の二程子ほか、司馬光や朱子なども講学し、睢陽書院・岳麓書院・白鹿洞書院とともに、四大書院に数えられるほど栄えた。しかし金代に入ると書院は廃され、嵩陽宮という道教施設に変わったが、それもやがて廃れた。明嘉靖七年（一五二八）に、知県侯泰が柏（後述）のあたりに嵩陽書院と二程祠を再建したが、それも明末には破壊された（明代に嵩陽書院が再建された場所と、五代から金代まで書院があった場所とについては、同じ所とする資料と、異なるとする資料とがある）。徐霞客が訪れたのは、この段階なので、三本の将軍柏と石碑が残るのみ。清康熙年間に再建され、書院としての機能も復活、「嵩岳廟志」「（康熙）登封県志」「説嵩」撰述に関わった景日畛もここで学んでいる。

○三將軍柏　漢の武帝がそのすばらしさに感嘆し、将軍に任じたという伝説がある。最も小さいものは、清康熙年間に焼失し、今残るのは二株のみだが、徐霞客訪問時は三株揃っていた。

○二程先生　北宋の儒者、程顥（一〇三二～一〇八五）号明道、程頤（一〇三三～一一〇七）号伊川兄弟。

○舊殿石柱　「嵩書」や「嵩岳遊記」に「石幢（はた）」とあるのがこれか。「名勝文物志」などによれば、八角柱で高さ三㍍あり、もともと四本あったことから房舎の遺蹟であり、唐代に韓愈らがここを訪れたことが、宋欧陽脩の撰文で記されていたという。しかし文化大革命中に、唯一残っていた一本も破壊され、現在は存在しない。

○范陽祖無擇　祖無擇は上蔡の人（河南省）、字は擇之。熙寧年間（一〇六八～一〇七七）に任官した記録がある。著に「龍学文集」（「四庫全書」所収）がある。「宋史」巻三三一本伝。徐霞客が出身地を范陽（河北省）としていることについて、「徐名山注」は、范陽が原籍であったが、そこが遼の支配下であったため、後に「上蔡の人」と称されるようになったのではないかと推測する。

○上谷寇武仲　不詳。上谷は河北省。「徐名山注」は、熙寧六年（一〇七三）に祖無擇と寇武仲が嵩山を訪れたとする。

○蘇才翁　北宋、銅山（四川省）の人、名は舜元。才翁は字。「宋史」巻四四二文苑伝に本伝がある蘇舜欽（一〇四〇頃出世）の兄。弟の伝の末尾に数文の記載がある。

○雄碑・唐碑　現存する唐碑の「大唐嵩陽観紀聖徳感応之碑」だろう。高さ九m、幅二m、厚さが一㎝ある。実際の撰文は李林甫（？～七五二）で、天宝三年（七四四）二月五日の建立。玄宗皇帝が不老長生の術を求めたことなどを記す。

○蛟螭　龍のたぐい。

○右　述べてきた雄碑を指す。

○裴迥撰文　「徐名山注」によれば、裴迥も玄宗朝の人で、撰文ではなく題辞を揮毫したのみという。

○徐浩八分　徐浩は玄宗朝の書家。八分は書体で、隷書と紛れることもある。

○崇福宮　漢元封元年（前一一〇）に武帝が嵩山に登った際、万歳の声が聞こえたという。その山が万歳峯であり、山麓に万歳観を作らせたのが始まり。その後太乙祠が作られ、唐高宗の時に太乙観と名を変える。宋真宗朝（九九八～一〇二二年）に崇福宮となり、宗教施設や娯楽施設が重建され、栄えた。金の侵入で破壊されるが元代に復元。元末に再び灰燼に帰するが明代に入って三度復興する。しかし明末には凋落し、遂に復元されなかった。徐霞客が訪れた時にはすでに建築物は存在していない。

○提點　宋代に置かれた点検調査する官職。訴訟や刑獄を掌る提點刑獄があるが、道観を点検する提點宮観もあり、初めは名士が務めた。のち士人が務める閑職となり、名儒たちの一時的な隠遁職として、そこが伝教の場ともなった。崇福宮の提點を務めたものに、范仲淹・司馬光・二程子などがおり、南宋時代はこの地は遼・金の支配下にあったのだが、朱子も任官している。

○啓母石　十㍍四方の巨岩で、塊がひとつ剥落している。「漢書」顔師古注引く「淮南子」によれば、禹が治水事業のために熊に変身していたところ、妻の涂山氏がそれを見てしまい、獣に嫁いだことを恥じて嵩山の麓で石になってしまった。丁度妊娠していたため、禹が「子どもを返せ」と呼んだところ、岩が割れて息子の啓が生まれたという。

○宋元碑　登封市でまとまった碑があるのは、少林寺・中岳廟・嵩陽書院。中岳廟では、北魏碑のほか、宋開宝六年（九七三）の「新修嵩岳中天王廟碑」や元後至元六年（一三四〇）の「聖旨碑」などが残る。

○會善寺　北魏孝文帝の時（四七一～四九九）に離宮が建てられたのが始まり。北魏の滅亡後寺院となり、隋開皇中（五八一～六〇〇）に会善寺の名を賜る。唐代にも皇室から尊崇され、則天武后は嵩山に幸すれば会善寺を訪れ、住持の道安禅師を国師とあがめ、老安国師の名を与えた。寺は安国寺の名を賜る。禅宗系の高僧がここを拠点として活躍し、天文学家としても高名な一行もここで修行し、瑠璃戒壇を設けた。封禅寺とも呼ばれた。後

梁代に破壊されたが、宋の太祖が復元、嵩岳瑠璃戒壇大会善寺の名を賜る。金元代に改修されたが、明末には衰亡したという。徐霞客は廃れているとは言っていない。清代に復興され、現在も元代建立の大雄殿などが残る。

○茶榜　石碑だろうが、「説嵩」にしか記録がない。それによれば、元僧学士李溥光の書で、峻極寺に移されているという。徐霞客が「元刻」とするのと符合する。現存するかは不明。

○戒壇記　勅戒壇碑。代宗大暦二年（七六七）に立てられたもので、裏面には徳宗貞元十一年（七九五）陸長源撰文の「戒壇記」が彫られている。「全唐文」巻五百十所収。

○汝州刺史陸長源　呉県の人。文学に長じる。汝州刺史ほか地方官を歴任したが、部下の反乱の中で殺された。「唐書」巻一五一本伝。

○河南陸郢　不詳。

○戒壇廃址　いまも遺蹟が残るのみ。

○草礫　草むらと石ころ。

○斷委　バラバラになって遺棄されている。

○郭店　現在も同名の集落がある。

○少林　少林寺。

○瑞光上人　不詳。

●口語訳

［二十二日］

《10》太室山南麓―嵩陽宮・嵩福宮・啓母石

山を下り、東に五里で、嵩陽宮の遺蹟に至る。三本の将軍柏だけが山のように鬱蒼と茂っている。漢代に将軍として封ぜられたものである。最も大きいものは大人七抱え程の太さがあり、中くらいのものは五抱えほど、最も小さいものでも三抱えほどである。将軍柏の北に、三間の室がある、程明道程伊川両先生を祀る。柏の西には昔の建築物の柱が一本残っているが、あらかた地面に埋もれている。宋代の人の題名が書かれているが、判別できるのは、范陽の祖無擇・上谷の寇武仲及び蘇才翁ら數人のみである。柏の西南には雄壮に聳える石碑があり、四面に彫られた龍の彫り物が誠に精巧である。これは唐代のもので、裴迥が文章を撰述し、徐浩が八分体で揮毫したものである。

また東に二里行き、崇福宮の遺蹟を通る。ここはまた万寿宮とも言う。宋代に宰相が業務を行った場所である。

さらにまた東に、啓母石がある。数間の家屋程の大きさである。そばに、砥石のように平らな石がある。

また東に八里進み、中岳廟に帰り着いて昼食を取る。ここでは宋代元代の石碑を鑑賞する。

西に八里で、登封県城に入る。

《11》会善寺から少林寺へ

（県城を抜け）西に五里進み、小道を西北に行く。

また五里で、会善寺に入る。「茶榜」の碑が寺内の西の小屋にある。元代の刻である。その後ろに、壁の下に倒れている石碑がある。唐の貞元年間の「戒壇記」である。汝州刺

史の陸長源が文章を撰述し、河南の陸郢が揮毫したものである。
また西に戒壇の遺蹟がある。残る石材に彫られた彫刻は精巧を極めているが、いずれもバラバラになって地面に遺棄されいてる。
西南に五里行くと、大きな道に出た。
また十里で、郭店に至る。ここから西南に折れれば、少林寺への道である。
五里で少林寺に入る。瑞光上人の宿坊に泊まる。
◆少林寺瑞光上人の宿坊に泊。

【二月二十三日】

＊概要：少室山に登る。最高峰の南寨を中心に遊覧。この日は晴天で風景を満喫する。下って少林寺に泊。訳注は三部に分けた。

■本文の部

二十三日　雲氣俱盡。入正殿、禮佛畢、登南寨。南寨者、少室絶頂、高與太室等、而峯巒峭拔。負「九鼎蓮花」之名。俯環其後者爲九乳峯。蜿蜒東接太室。其陰則少林寺在焉。寺甚整麗、庭中新舊碑森列成行、俱完善。夾墀二松、高偉而整、如有尺度。少室横峙於前、仰不能見頂。遊者如面牆而立。輒謂少室以遠勝。余昨暮入寺、即問少室道、俱謂雪深道絶、必無往。凡登山以晴朗爲佳。余登太室、雲氣瀰漫、或以爲仙靈見拒、不知此山魁梧、正須止露半面。若少室工於掩映、雖微雲豈宜點滓。今則霽甚、適逢其會、烏可阻也。乃從寺南渡澗登山。

六七里、得二祖庵。山至此忽截然土盡而石、石崖下墜成坑。坑半有泉、突石飛下、亦以「珠簾」名之。余策杖獨前、愈下愈不得路、久之乃達。其巖雄拓不如盧巖、而深峭過之。巖下深潭泓碧、僵雪四積。再上、至煉丹臺。三面孤懸、斜倚翠壁。有亭曰小有天、探幽之屐、從未有抵此者。過此皆從石脊仰攀直躋、兩旁危崖萬仞、石脊懸其間、殆無寸土。手與足代匱而後得升。凡七里、始躋大峯。峯勢寛衍、向之危石、又截然忽盡爲土。從草棘中莽莽南上、約五里、遂凌南寨頂、屏翳之土始盡。南寨實少室北頂、自少林言之、爲南寨云。蓋其頂中裂、横界南北。北頂若展屏、南頂列戟峙其前、相去僅尋丈、中爲深崖、直下如剖。兩崖夾中、坑底特起一峯、高出諸峯上、所謂摘星臺也、爲少室中央。絶頂與北崖離倚、彼此斬絶不可度。俯矚其下、一絲相屬。余解衣從之、登其上、則南頂之九峯森立於前、北頂之半壁横障於後、東西皆深坑、俯不見底、罡風乍至、幾假翰飛去。

從南寨東北轉、下土山、忽見虎跡大如升。草莽中行五六里、得茅庵。擊石炊所攜米爲粥、啜三四碗、饑渴霍然去。倩庵僧爲引龍潭道。下一峯、峯脊漸窄、土石間出、棘蔓翳之、懸枝以行、忽石削萬丈、勢不可度。轉而上躋、望峯勢蜿蜒處趨下、而石削復如前。往復不啻數里、乃迂過一坳、又五里而道出、則龍潭溝也。仰望前迷路處、危崖欹石俱在萬仞峭壁上。流泉噴薄其中、崖石之陰森嶄巖者、俱散成霞綺。峽夾澗轉、兩崖靜室如蜂房燕壘。凡五里、一龍潭沉涵疑碧、深不可規以丈。又經二龍潭、遂出峽、宿少林寺。

■訳注の部

［その一］

●訓訳

二十三日　雲氣俱に盡く。正殿に入り、佛を禮し畢りて、南寨に登る。南寨は、少室の絶頂にして、高さは太室と等しくして、峯巒峭拔す。「九鼎蓮花」の名を負ふ。俯して其の後ろを環するものは九乳峯たり。蜿蜒として東のかた太室に接す。其の陰には則ち少林寺焉に在り。

寺は甚だ整麗にして、庭中に新舊の碑　森列して行を成し、俱に完く善し。墀を夾むの二松あり、高偉にして整なり、尺度有るが如し。少室　前に横峙す、仰ぎて頂を見る能はず。遊ぶ者　牆に面して立つが如し。輒ち謂ふ、少室は遠を以て勝れりと。

余　昨暮に寺に入るに、即ち少室の道を問ふに、俱に「雪深く道絶し、必ず往くこと無けん」と謂ふ。凡そ山に登るは晴朗を以て佳となす。余　太室に登るに、雲氣瀰漫せり。或ひは以爲らく「仙靈に拒まる、此の山の魁梧なるを知らしめず、正に須に半面を露するに止まる」と。若し少室の掩映に工なれば、微雲ありと雖も豈に宜しく點滓せんや。今則ち霽るること甚し、適々其の會に遭ふ、烏んぞ阻むべけんや。乃ち寺の南より澗を渡りて山に登る。

●語注

○正殿　いわゆる大雄宝殿か。金の大定九年（一一六九）の創建と伝える。明清代に重修されたが、民国十七年（一九二八）に焼失。長らく放置されていたが、一九八四年に至って再建された。

○南寨　今は御寨という。金の宣宗がかつてここに軍をしいたことから「寨」の名がついたという。頂部分はやや平坦な地形で、そこへ至るには険要の地を通らなければならず「一夫当関、万夫莫開」と称された。

○九鼎蓮花　少室山の頂が九つに裂けていることの表現。

○九乳峯　九つの乳房のような突起が並んでいることをいうか。少室山の北側の諸峯をいうのだろう。現在五乳峯と称される山があるが、そこは少室山から少林寺をはさんだ北側にあたる。

○森列　厳かに並ぶ、あるいは森林のように並ぶ。

○墀　建物の台状の部分。

○或以爲　ここでは自問自答と取った。諸注は、実際に誰か他人にこう言われたと取るが、それでは不自然であろう。

○工於掩映　工は巧み、優れているでよかろう。徐霞客「游黄山日記」に「宛轉隨溪，群峰環聳，木石掩映」とあり、「漢語大詞典」は「遮映襯托（隠したり被ったりして、互いに相手を映えさせる）」と訳す。少室山自らが映えることに巧みである、と解した。

○點滓　汚れをつけること、美を損なうこと。

●口語訳

［二十三日］

《12》少林寺から少室山へ

雲も霧もすべて散って消えた。少林寺の正殿に入り、仏を礼賛し終えてから南寨に登る

ことにした。南寨は、少室山の絶頂で、高さは太室山と同じくらいであるが、尖った峯が高く抜きんでている。「九鼎蓮花」の名を冠されている。少室山の後ろを低く取り巻くのが九乳峯である。うねうねと伸びて東の太室山まで続いている。その北に少林寺がある。

少林寺はとても荘重秀麗であり、庭院には新旧の石碑が荘厳に立ち並び、全くすばらしい。台の部分の両側に二本の松があり、高く雄大に伸びていて整っており、寸法を測ったかのようである。ここから少室山が目の前に横たわっている。振り仰いでも頂上を見ることができない。遊覧に来た者は、壁に向かって立っているようである。そこですぐに思った「少室山は遠景こそ勝る」と。

私は昨晩少林寺に着いたとき、すぐに少室山への道を聞いたところ、誰もが「雪が深く道も途絶えており、行くのはよくない」と言った。確かに一般には、山に登るのは晴朗の時がよい。しかし私が太室山に登ったときは、雲や霧が立ちこめていた。あるいは「山の神が遊客を拒んでいるのであり、この山の雄偉高大さを知らせたくなかったので、ただ山の半面だけを見せた」ということなのかもしれない。しかしもしも少室山が、その優美さを映えさせることに優れていたならば、少々の雲があったとしてもその美を損なうことはできないだろう。まして今はとても晴れており、最高のチャンスである。どうして行くのを阻めようか。そこで寺の南から山澗を渡って山に登る。

［その二］

●訓訳

六七里にして、二祖庵を得。山は此に至りて忽ち截然として土盡きて石なり、石崖下墜して坑を成す。坑の半ばに泉有り、石を突きて飛下す、亦た「珠簾」を以て之に名す。余杖を策きて獨り前むに、愈々下るに愈々路を得ず、之を久しくして乃ち達す。其の巖の雄拓は盧巖に如かず、而して深峭は之に過ぎたり。巖の下は深き潭の泓碧たりて、僵雪四積す。

再び上り、煉丹臺に至る。三面孤懸にして、斜に翠壁に倚る。亭有り、小有天と曰ふ。探幽の屐にして、從りて未だ此に抵る者有らざるなり。此を過ぐるは皆な石脊より仰ぎ攀して直躋す、兩旁は危崖萬仞にして、石脊　其の間に懸かる、殆んど寸土無し。手と足と代々匱して而る後に升るを得。

凡そ七里にして、始めて大峯を躋む。峯勢は寛衍にして、向の危石、又　截然として忽ち盡く土となる。草棘中の莽莽たるより南に上ること約五里にして、遂に南寨の頂を凌ぐ。屏翳の土始めて盡く。

南寨は實は少室の北頂なり、少林よりして之を言へば、南寨となすと云ふ。蓋し其の頂は中ごろ裂け、南北に横界たり。北頂は展屏の如く、南頂は戟を列して其の前に峙す。相ひ去ること僅に尋丈のみにして、中は深崖となり、直ちに下ること剖くるが如し。兩崖夾の中に、坑底に特起せる一峯あり、諸峯の上に高出す、所謂る摘星臺なり。少室の中央たり。絶頂は北崖と離倚し、彼此斬絶にして度るべからず。其の下を俯矚するに、一絲の相屬するのみ。余　衣を解きて之に從ひ、其の上に登る。則ち南頂の九峯　前に森立し、北頂の半壁　後ろに横障し、東西は皆に深坑にして、俯するに底を見ず。罡風乍ち至り、幾んど翰を假りて飛去せんとす。

●語注

○二祖庵　禅宗二祖の慧可にちなむ建築物。慧可は少林寺で六年間達磨に学んだと伝えられる。庵は少林寺から西南に四㌔の鉢盂峯上に位置し、明代の創建。
○截然　明らかに、はっきりと。
○珠簾　嵩山二十景に「珠簾飛瀑」がある。少室山の北、二祖庵の南に、数十ｍもの崖があり、そこから一筋の滝が流れ落ちているという。
○泓碧　水が清らかで青々としている様。
○僵　倒れる。ここでは雪が積もっていることか。
○煉丹臺　煉魔台か。二祖庵の南にある四角い岩。慧可が達磨に入門を請うたとき、自らの左腕を切断して、修行への覚悟を示したという。養臂台、経行処、覓心台などの異称がある。
○孤懸　孤立、まわりから孤絶していること。
○小有天　不詳。
○屐　もと靴。ここでは足跡。
○從　従来、これまで、の意。
○匱　力が尽きる。
○大峯　少室山の主峯。
○摘星臺　「嵩書」に摘星巌があり、「在少室之東、挺出雲表、壁直如岑樓之状」とある。
○九峯　南の峯が九つに分かれているのであろう。
○罡風　強い風。道教では高いところで吹く風。神仙がそれに乗って飛ぶ。
○翰　羽毛。

●口語訳

《13》少室山を登る―二祖庵・煉丹台・大峯・南寨（頂上）

六七里で、二祖庵である。山はここに至って急にすっぱりと土気がなくなり、石だらけとなる。石の崖が下に落ち込んで竪穴を成している。竪穴の中程に泉があり、その水が湧き出して岩石を突き破って飛び、流れ落ちている。ここも亦た「珠簾」と命名されている。私はただ一人で杖をつきながら進んだが、下れば下る程道がなくなり、しばらくしてようやく崖の底にたどり着いた。この岩の高さ大きさは盧巌にはかなわないが、その幽深さ険しさはこちらの方が勝っている。岩の下には青々とした深い淵があり、その四周には積雪が固まっている。

再び岩を登り、煉丹台に至る。台の三面は絶壁をなし、一面だけが青々とした崖によりかかっている。上に亭があり、小有天という。これまで探幽の客で、ここに至ったものは誰一人いない。ここから先は、石の尾根上を、振り仰いで石にかじりつき真っ直ぐに登る。左右両側は万仞もの切り立った崖で、その接合部分が尾根であるが、その幅は一寸ほどもない。手の力が尽きたら足を用い、足の力が尽きたら手を用いと、全身の力を振り絞って、ようやく登ることができた。

七里ほどで、ようやく大峯にたどり着く。大峯の地勢は平らでひろびろとしており、先ほどまで険しい岩がごつごつしていたのが、突然変わって一面が土に被われている。草や荊が茫々と生い茂る中を南に登ること五里ばかりで、ようやく南寨の頂に着く。岩を被っ

ていた土もここでは全く無くなった。

南寨は実は少室山の北頂である。少林寺から言えば、「南の寨」となるということだ。おおよそその頂は、中頃から裂けており、南北二つの部分に横ざまに断裂している。北側の頂は広げた屏風のようで、南側の頂は矛戟を並べて対峙するかのよう。両者の間は八尺から一丈ほどしかなく、そこは深い崖谷となって、断ち切ったように険しい。両側の崖に挟まれた谷底から、一座の山峯が突起していて、他の諸峯から高く抜きんでている。これがいわゆる「摘星台」である。少室山のまさに中央である。その絶頂は北側の崖とつかず離れずの形勢で、両者は断絶していて渡ることはできないようだ。しかし絶頂の下あたりを見下ろしてみると、糸一筋くらいで北の崖とつながっているところがあった。そこで私は衣を脱いでそこによることにし、台の絶頂に登った。すると南側の頂である九つの峯が目の前に森林のように立ちふさがり、後ろには北側の頂が屏風のように横様に広がり、東西はどちらも深い竪穴となっていて見下ろしても谷底が見えない。そこへ神仙が乗るような強い風が吹き寄せてきたが、あたかも羽毛を借りて飛び去らんかのようであった。

[その三]

●訓訳

南寨より東北に轉じ、土山を下る、忽ち虎跡の大いさ升の如きを見る。草莽の中を行くこと五六里にして、茅を得。石を擊ち、攜し所の米を炊いで粥となす。啜ること三四碗にして、饑渇　霍然として去る。庵僧に龍潭に引するの道たるを倩ふ。

一峯を下る。峯脊漸く窄く、土石間に出で、棘蔓して之を翳ふ。枝に懸りて以て行くに、忽ち石の削らるること萬丈にして、勢ひ度るべからず。轉じて上り躋む、峯勢の蜿蜒たる處を望みて趨り下るに、石の削らるること復た前の如し。往復すること啻(ただ)に數里のみならざるに、乃ち一坳を迂過す。又　五里にして道出づ、則ち龍潭溝なり。仰ぎて前に迷路の處を望むに、危崖欹石俱に萬仞峭壁の上に在り。流泉其の中に噴薄し、崖石の陰森嶄巖たる者、俱に散じて霞綺を成す。峽は澗を夾みて轉じ、兩崖の靜室　蜂房燕壘の如し。凡そ五里にして、一龍潭の沉涵疑碧たるあり、深きこと規るに丈を以てすべからず。又　二龍潭を經、遂に峽を出づ。少林寺に宿す。

●語注

○爲引龍潭道　うまく読めない。仮に右のように訳した。
○坳　山の窪地、平地。
○龍潭溝　「河南図・登封県」に見える。
○陰森　樹木が鬱蒼と茂る様。
○嶄巖　山が険しい様。
○霞綺　彩絹のように美しく色づいた霞。水滴が虹を成しているのであろう。
○靜室　清浄な部屋。出家者の修行の場。

●口語訳

《14》少室山を降る―龍潭溝を経て少林寺へ

南寨から東北に転じ、土に被われた山を下ると、にわかに升ほどの大きさの虎の足跡を

見つけた。草ぼうぼうの中を更に五六里いくと、茅屋があった。そこで宿を借り、火をおこして持参した米を炊いてお粥を作った。三四杯すすると、飢えや渇きがすっと消え去った。庵の僧侶に、龍潭へ至るの道を質問する。

一座の峯を下る。峯の背（尾根）はだんだん狭くなり、土と石とが交互に交じり、其の上を荊が伸びて被っている。そんなところを枝に手を掛けながら進んでいくと、突然一万丈もの崖が出現し、渡れそうもない。そこで道を転じて登っていく。峯の勢いがうねうねと伸びているところを見上げながら走り下ると、先の所と同じように石の崖が削られている所に出た。行ったり来たりを数里以上も繰り返し、やっと窪地を迂回できた。更に五里で道路に出ると、そこが龍潭溝である。振り仰いで、先に道に迷った所を眺めてみると、険しい崖や斜めに飛び出した石が万仞ほどの切り立った高い障壁の上にあった。清流が其の中から吹き出し迫り、鬱蒼と緑が茂る険しい石の壁に降り注いで、色彩豊かな美しい霞を形成している。峡谷は谷川を挟みながら曲がり、両岸に建つ僧侶や道士の庵が、蜂の巣や燕の巣のように見える。おおむね五里ほどで、深くまた緑の濃い一龍潭がある、その深さは丈の単位では測りきれない程である。更に二つの龍潭を経由して、ようやく峡谷を出る。この日も少林寺に泊まる。

◆少林寺に泊。

【二月二十四日】

＊概要：少林寺周辺の、達磨大師に関わる古跡などを参観。嵩山を出て、西北に轘轅関を抜けて、大屯に泊。

■本文の部

二十四日　從寺西北行、過甘露臺、又過初祖庵。北四里、上五乳峯、探初祖洞。洞深二丈、闊殺之。達摩九年面壁處也。洞門下臨寺、面對少室。地無泉、故無棲者。下至初祖庵、庵中供達摩影石。石高不及三尺、白質黑章、儼然胡僧立像。中殿六祖手植柏、大已三人圍。碑言自廣東置鉢中攜至者。夾墀二松亞少林。少林松柏俱修偉、不似岳廟偃僕盤曲、此松亦然。下至甘露臺。土阜矗起、上有藏經殿。下臺歴殿三重、碑碣散布、目不暇接。後爲千佛殿、雄麗罕匹。出飯瑞光上人舍。策騎趨登封道、過轘轅嶺、宿大屯。

■訳注の部

●訓訳

二十四日　寺より西北に行き、甘露臺を過ぎ、又　初祖庵を過ぐ。北に四里にして、五乳峯に上り、初祖洞を探る。洞は深さ二丈、闊さは之に殺ぐ。達摩九年面壁の處なり。洞の門は下　寺に臨み、少室に面對す。地に泉無し、故に棲む者無し。下りて初祖庵に至る。庵中に達摩影石を供す。石は高さ三尺に及ばず、白質黑章にして、儼然たる胡僧の立像なり。中殿に六祖手植の柏あり、大なること已に三人圍なり。碑に言ふ、廣東より鉢中に置きて攜へ至る者なりと。夾墀の二松は少林に亞ぐ。少林の松柏は俱に修偉にして、岳廟の偃僕盤曲なるには似ず、此の松も亦た然り。下りて甘露臺に至る。土阜矗起し、上に藏經

殿有り。臺を下り殿の三重なるを歴す、碑碣散布し、目接するに暇あらず。後ろは千佛殿たり、雄麗匹なる罕し。出でて瑞光上人の舍に飯す。騎を策うちて登封の道を趨り、轘轅嶺を過ぎ、大屯に宿す。

●語注

○甘露台　寺の西にある自然の岩。「少林寺誌」によれば、北魏の時代にインド僧の跋陀がここで仏典を漢訳していたところ、天より甘露が降ってきたのでかく名付けた、という。明代に寺院が造られ、今一部が残るという。

○初祖庵　北宋時代に達磨大師を記念して造られた。

○五乳峯　少室山の北麓にあり、五つの峯が聳えていることからの命名。「河南図・登封県」に見える。

○初祖洞　達磨面壁九年を行ったと伝える洞。達磨洞ともいう。

○達磨影石　達磨の姿が、映ったという。

○胡僧　異民族、とりわけシルクロードあたり出身の僧侶。達磨大師がそうであったのでかく言うか。

○六祖　慧能（六三八～七一三）。

○夾墀二松　少林寺にも同じ表現があった。少林寺のものとの比較でこの表現をしているので、これは初祖庵の松を指しているはずである。墀を夾んで二本の松を植えるのは、定式なのだろうか。

○蔵経殿　いまの蔵経閣だろう。法堂、講堂ともいう。典籍や仏具を保管し、また高僧による説法講学が行われた。元代の創建。民国十七年（一九二八）に罹災し焼失。一九九二年に再建された。

○千仏殿　毘盧閣ともいう。様々な仏像が安置されている。明万暦年間の創建。

○轘轅嶺　登封から西北の偃師県との境をなす。中岳八景に「轘轅早行」がある。「河南図・登封県」に見える。

○大屯　偃師県内の小鎮。今も同じ。登封から洛陽へ至るルート上に位置する。

●口語訳

［二十四日］

《15》少林寺西北の名蹟―初祖庵・初祖洞・甘露台・蔵経殿

少林寺から西北に行き、甘露台を通り過ぎ、さらに初祖庵を通り過ぎる。北に四里で、五乳峯に登り、初祖洞を探索する。洞は深さが二丈、広さはそれよりも少し減じる。達磨大師が九年間壁に向かって座られたところである。洞の門は、下の方では少林寺に臨み、遠く少室山と向かい合っている。ここには泉水がない、だから今は棲む人もいない。

下って初祖庵に戻る。庵の中に達磨影石が供えてある。石は高さは三尺もなく、表面は白い中に黒い模様があって、荘厳な胡僧の立像である。庵の中殿に六祖が手ずから植えられた柏がある、その大きさはすでに大人三抱えほどもある。石碑によれば、慧能が鉢に入れて広東から持ってきたものだという。台を夾んで立つ二本の松は、少林寺に於けるそれに次ぐものである。少林寺の松はすべて真っ直ぐ高く伸びていて、中岳廟の松が倒れ傾いたり、曲がったりしているのとは異なる。ここ初祖庵の松も、直立していて中岳廟のもの

とは異なる。
　庵を下って甘露台に至る。土の丘が盛り上がり、その上に蔵経殿がある。台から降りて三層の殿宇を廻る、碑刻があちこちに散在していて、見て回る時間が足りないくらいである。その後ろは千仏殿である、その雄壮華麗さは比すべきものがないほどである。
　殿を出て、瑞光上人の房で昼食を取る。

《16》登封を出て西へ

そして出発し、馬を急がせて登封県からの大道を走る。

［河南河南府偃師県域］

　轘轅嶺を通り過ぎ、大屯で宿泊とした。

◆大屯に泊。

【二月二十五日】

＊概要：西南に進み、龍門石窟を参観。

■本文の部

　二十五日　西南行五十里、山岡忽斷。即伊闕也。伊水南來經其下、深可浮數石舟。伊闕連岡、東西横亙、水上編木橋之。渡而西、崖更危聳。一山皆劈爲崖、滿崖鐫佛其上。大洞數十、高皆數十丈。大洞外峭崖直入山頂、頂俱刊小洞、洞俱刊佛其内。雖尺寸之膚、無不滿者、望之不可數計。洞左、泉自山流下、匯爲方池、餘瀉入伊川。山高不及百丈、而清流淙淙不絶、爲此地所難。伊闕摩肩接轂、爲楚・豫大道、西北歴關・陜。余由此取西嶽道去。

■訳注の部

●訓訳

　二十五日　西南に行くこと五十里にして、山岡忽ち斷つ。即ち伊闕なり。伊水の南より來りて其の下を經る、深さ數石の舟を浮かぶべし。伊闕は岡を連ね、東西に横亙して、水上に木を編みて之を橋とす。渡りて西すれば、崖更に危聳たり。一山皆な劈せられて崖となり、滿崖　其の上に佛を鐫る。大洞は數十、高さ皆な數十丈あり。大洞は外は峭崖の直ちに山頂に入り、頂は俱に小洞を刊す、洞は俱に其の内に佛を刊す。尺寸の膚と雖も、滿たざる者無く、之を望むに數計すべからず。洞の左に、泉の山より流れ下り、匯して方池をなし、餘は瀉して伊川に入る。山の高さは百丈に及ばず、而して清流は淙淙として絶えず、此地の難しとする所となる。伊闕　摩肩接轂し、楚・豫の大道となる、西北して關・陜を歴す。余　此より西嶽の道を取りて去る。

●語注

○伊闕　伊水ぞいの闕のような山。今の龍門山。
○伊水　伊河、伊川とも。
○石　量の単位。明代では、およそ百リットル。
○摩肩接轂　肩を擦り、車の軸を擦れあう。人車の往来が激しい様。

○楚　湖北省。
○豫　河南省。
○關　関中。
○陝　陝西省。
○西岳　華山。

●口語訳

［二十五日］

《17》龍門

［河南洛陽府洛陽県域］

西南に五十里行くと、山が突然途切れた。こここそ伊闕である。伊水が南から流れてきて、この下を流れるが、水深は数石の穀物を積んだ船を浮かべられるほどである。伊闕は山が連なっているが、東西に横にまたがるように、伊水の上に木を編んだ橋を架けている。この橋を渡ると、崖が更に険しく聳えている。一座の山がみんな削られて崖状になり、崖いっぱいに仏像が彫られている。大きな洞は数十あり、それぞれの高さは数十丈もある。大きな洞がある外側の崖壁は、そのまま頂上まで続いており、頂上付近にも小さな洞が彫られており、それぞれの洞に、すべて仏が彫られている。僅かな表面でも彫られていないところは無く、眺めるととても数え切れるものではない。洞がある左側に、山から流れ落ちる泉水があり、貯まって四角い池をなし、あふれた水は伊水に流れ入る。山の高さは百丈にも及ばないのに、清流はさらさらと途切れることはない。これこそこの場所が得難いものである点である。ここ伊闕の地は、人車の往来の激しいところで、湖北と河南を結ぶ大道にあたり、西北に行けば関中・陝西へと通じる。私はここから西岳への道を取って行く。

（終）

（訳注：薄井俊二、二〇一二年一二月一二日）＊
（加筆修正：薄井俊二、二〇二三年五月九日）

＊口語訳と簡単な注を「「徐霞客遊記」訳注稿　名山遊記（二）―「遊嵩山日記」―」（『埼玉大学国語教育論叢』第十五号、二〇一二）に掲載。